

1968

大正十三年一月二十九日第三種郵便物認可  
大正十三年七月十日發行(每月一回十日發行)

永樂町人編輯



七月號

【號五十六第】

金剛山雜詩

心をば松ふく風に殘しおきて月におり行く金剛の山（大町桂月）

閑古鳥みわにたかなき木蓮の香路にみつ蓬來の山（菊池幽芳）

天地の密教とこそいふべけれ金剛山の秋の夕ばえ（大倉鶴彦）

萬二千いかなる神のたくみもて削り成しけんあはれこの山（鮎貝房之進）

萬壑秋酣紅映黃。削成天斧是金剛。不將雄筆闡奇勝。故放山靈獨壇場（徳富蘇峰）

群仙相構迎吾立。玉女顰然爲我容。好挾飛星游碧落。雲高一萬二千峰（橋本關雪）

滿溪翠翠雜松楓。純石成山各異容。天下奇觀推此地。金剛一萬二千峰（高島北海）

千仞絶崖磨者誰。金剛力士聖天知。生憎五百仙人笑。低首抵書一小辭（志賀重昂）

京 城 本 町 進 辰 馬 氏 (藏所)



# 京城雜筆七月號執筆者

(大體原稿到着順)

丸山 鶴吉	(警務局長)	國境の赤坊	(二)
時實 秋穂	(京畿道知事)	平凡の輝	(三)
佐藤 剛藏	(京城醫專教授)	人は自ら生きる	(四)
泥谷 西晴	(京日副社長)	英語の先生	(五)
齋藤 庄三郎	(京城地方法院長)	藝術小觀	(六)
守屋 三乘	(朝鮮殖産銀行)	藝術經濟	(七)
高木 背水	(西洋畫家)	金剛山に就て	(八)
水谷 九二吉	(古河鑛業主任)	硬軟とりく	(九)
藤井 寛太郎	(不二興業社長)	忙中閑筆	(一〇)
足立 丈次郎	(京畿道評議員)	夏日雜筆	(一一)
坪内 孝	(第一高女校長)	偶感	(一二)
名村 寅雄	(大毎支局長)	とりとめなきの記	(一三)
野崎 眞三	(朝鮮社會部長)	朝鮮新聞自慢話	(一四)
西村 滿藏	(京日社會部長)	京日自慢話	(一五)
天日 常次郎	(實業家)	朝鮮米と私の平生	(一六)
鳩鈴亭主人		本町漫筆	(一七)
篠田 治策	(李王職次官)	首の話	(一八)
松井 民次郎	(平壤、實業家)	南大門	(一九)
山口 太兵衛	(實業家)	京城昔ばなし	(二〇)
岸 巖	(朝鮮銀行)	青葉の門	(二一)
野田 神郷	(殖産銀行)	雨の日曜の記	(二二)
川端 三天郎	(角田商會支那人)	涼榻隨筆	(二三)
伊藤 大輔	(京日經濟部長)	株主にもいろく	(二四)
田村 直一	(朝鮮警察新聞編輯長)	流行と小生	(二五)
別府 八百吉	(京城日理事)	篠田博士に望む	(二六)
伊集院 兼雄	(京城日報社)	刑事部屋のぞ記	(二七)
青柳 南冥	(京城新聞社長)	平家一門	(二八)
井上 收	(大朝支局長)	初會馴染の挨拶	(二八)
秋山 忠三郎	(京日通信部長)	京城新聞界の變遷	(三〇)
工藤 武城	(京城婦人病院院長)	洗硯閑話	(三一)
西村 正雄		或月給取の哲學	(三三)
加藤 賢	(京城府衛生課長)	變なことも	(三四)
鍛崎 篤志郎	(三越呉服店)	流行雜感	(三四)
河西 青苔	(京城日報社)	お前の誕生まで	(三六)
永樂町人		漫語	(三七)

(其他社友數氏執筆)

金剛山雜詩

◇ 心をば松ぶく風に殘しおきて月におり行く金剛の山（大町桂月）

◇ 閑古鳥みわにたかなき木蓮の香路にみつ蓬來の山（菊池幽芳）

◇ 天地の密教とこそいふべけれ金剛山の秋の夕ばえ（大倉鶴彦）

◇ 萬二千いかなる神のたくみもて削り成しけんあはれこの山（鮎貝房之進）

◇ 萬壑秋酣紅映黃。卽成天斧是金剛。不將雄筆闡奇勝。故放山靈獨壇場（徳富藤峰）

◇ 群仙相楫迎吾立。玉女孺然爲我容。好挾飛崖游碧落。雲高一萬二千峰（橋本關雪）

◇ 滿溪紫翠雜松楓。純石成山各異容。天下奇觀推此地。金剛一萬二千峰（高島北海）

◇ 千仞絕崖躋者誰。金剛力士聖天知。生憎五百仙人笑。低首抵書一小辭（志賀重昂）

京 城 本 町 進 辰 馬 氏 (藏 所)



京城雜筆七月號執筆者

(大體原稿到着順)

丸山 鶴吉	(警務局長)	國境の赤坊	(二)
時實 秋穂	(京畿道知事)	平凡の趣	(三)
佐藤 剛藏	(京城醫專教授)	人は自ら生きる	(四)
泥谷 西晴	(京日副社長)	英語の先生	(五)
齋藤 庄三郎	(京城地方法院長)	藝術小觀	(六)
守屋 三乘	(朝鮮殖産銀行)	魔術經濟	(七)
高木 背水	(西洋畫家)	金剛山に就て	(八)
水谷 九二吉	(古河鑛業主任)	硬軟とりく	(九)
藤井 寛太郎	(不二興業社長)	忙中閑筆	(一〇)
足立 丈次郎	(京畿道評議員)	夏日雜筆	(一一)
坪内 孝	(第一高女校長)	偶感	(一二)
名村 寅雄	(大毎支局長)	とりとめなきの記	(一三)
野崎 眞三	(朝新社會部長)	朝鮮新聞自慢話	(一四)
西村 滿藏	(京日社會部長)	京日自慢話	(一五)
天日 常次郎	(實業家)	朝鮮米と私の半生	(一六)
崎輪亭主人	.....	本町漫筆	(一七)
篠田 治策	(李王職次官)	首の話	(一八)
松井 民次郎	(平壤、實業家)	南大門	(一九)
山口 太兵衛	(實業家)	京城昔ばなし	(二〇)
岸 巖	(朝鮮銀行)	青菜の門	(二一)
野田 神郷	(殖産銀行)	雨の日曜の記	(二二)
川端 三次郎	(角田商會支配人)	涼榻隨筆	(二三)
伊藤 大輔	(京日經濟部長)	株主にもいろく	(二四)
田村 直一	(朝鮮警察新聞編輯長)	流行と小生	(二五)
別府 八百吉	(京城日理事)	篠田博士に望む	(二六)
伊集院 兼雄	(京城日報社)	刑事部屋のぞ記	(二七)
青柳 南冥	(京城新聞社長)	平家一門	(二八)
井上 收	(大朝支局長)	初會馴染の挨拶	(二八)
秋山 忠三郎	(京日通信部長)	京城新聞界の變遷	(三〇)
工藤 武城	(京城婦人病院長)	洗硯閑話	(三一)
西村 正雄	.....	或月給取の哲學	(三二)
加藤 賢	(京城府衛生課長)	變なことども	(三四)
數崎 篤志郎	(三越呉服店)	流行雜感	(三四)
河西 青苔	(京城日報社)	お前の誕生まで	(三六)
永樂町人	.....	漫語	(三七)

(其他社友數氏執筆)



國境の赤坊

丸山 鶴吉

一、こゝは朝鮮北端の二百里餘りの鴨綠江渡れば荒漠南滿洲

二、極寒零下三十餘度 卯月の半に雪消えず 夏は水沸く百と餘度

三、勤むる我々同胞の安き夢だに結び得ぬ 警備の辛苦誰れか知る

この國境警備の歌を、悠長な悲壯な曲で、歌ひ出づる母に、國境警備の重任に膺つて居る警察官諸君の辛苦の有様が、まさしく眼に見るやうに感ぜられる、況んや江岸第一線に立つて、脚下に流れる鴨江を臨み、廣漠たる支那地の山川に對して、この歌を口ずさむ時、本統にしみくと國境勤務の、意義と苦痛とを感得せしめられるのである。

昨年も總督閣下に陪して、鴨綠江の一部を巡視し、本年は二百餘里の鴨綠江岸の殆んど全部を下江した。寂寞と孤獨と、危険と辛苦との中にも、江岸生活に多少の落付きと趣味さが出來たのだと思はれることは、警察官諸君の家族の同棲が著しく増加したことである。江岸配置の警察官の多くは青春の意氣燃る青年獨身者が多かつたのに、次第に結婚が増して新婚の温き夢をこの意義ある江岸の駐在所に結ぶ様になつた人が多い。それ

到る處で妊娠の夫人に逢ふ、そして大抵の夫人が當年一二歳の子供を抱へて迎へられるのに逢ふ。不思議に國境には赤坊が多いなどいふ感を與へられる。喜ばしい嬉しいことである。

それに國境を歩いた誰れでもが感ずることであるが、この國境の赤坊は揃ひも揃つて皆んな、本統に可愛らしい顔立ちをして居る。昨年伊津野巡査部長夫人の殉職された、渭原管内舊邑駐在所に立寄つた際の如きも、三人の巡査の夫人が皆一様に一二歳の赤坊を抱いて出迎へられた、兩親の辛苦は夢知らず、母親の腕にすや／＼と眠つて居た、この赤坊の頭巾を一つとりのけて、天女の様な、やさしい美しいその面貌を見たときに、喰付きたい様な感をしたが、本年も幾多の場所と同様な經驗をしたのである。

和合した夫婦の間には奇麗な可愛い子供が生れると、昔から訓はれて居る、親の心持や氣分が子供に影響することが、眞理であれば、このことは確に事實に相違ない、よく和合しよく親愛せる夫婦の心持や氣分が、自然と子供の面貌の上で表現せられるものであらう。國境の様な人煙稀な浦淋しい所で家庭を營んで居られる警察官諸君の家庭は眞に羨ましい程平和で親密

である。要としては天上天下自分の夫に親むより外何ものもない。夫をしても自分の妻に慰められ愛せられるより外、慰籍の途も求め得られない。それに始終危險が身に及んで居ることであるから、國境に警備の勤務に出掛ける度毎に生別死別のときと思ひ極める譯である。妻は夫の身の上を案じ、夫は妻の起居を案じて、麗はしい心の共鳴と感通とを感じながら、その日／＼を過して居る譯で和合と融和とが出來なければならぬ環境であるとも謂はれるのである。國境の赤坊は本統に可愛らしい、國境の赤坊は本統に温良だ、そんなるべき素地が充分にあるのだと判断した次第である。これは人生の又なき幸福であると思ふ。私はこの事實を新らしい發見でもした様に嬉しく思つて、京城雜筆を煩いしたのは外でもない、國境勤務者の幾何かの慰めにもなるだらうし、又我々日常の生活にも尊い暗示が含まれて居る様に思ふからである。

◆背水氏の事

柳井純 一

高木背水氏夫妻が相携へて、四度目の洋行に旅立つと言ふ噂がある此の人のやうに朝鮮の土と人とを愛する人はなからう、亦此の人のやうに、名利を一片の雲と顧する人もなからう。記者は往十里外の一穩士に對して深い尊敬を有つものである。



平 凡 の 趣

時 實 秋 穂

藤原資朝卿が東寺の門で雨宿りをせられて、不具者共の集つて居るのを見られた話が徒然草に出て居る。初めの間は手足の歪むたり顔貌の異様なのを何れもとりく面白くと感心して見て居られたが、間もなく厭氣がさして、矢張り素直なのがよいと仰せられ、家に歸つて、日頃大切に居られた盆裁なども廻捨てられたと云ふので兼好法師『さもありぬべき事なり』と評して居る。

何でも奇抜を喜び極端を好むのは随かに此の頃の人の悪い癖だ。當り前のことを見るとあれは平凡だと云ふて片付けて了ふ。亭々天に沖する底の棟梁の大樽よりも、營善不良で枝も幹も曲りくねつた不具物を、やれ雅味があるの趣があるのと調法がる。偉い人と云ふと何か人真似の出来ぬ魔法使でもあるかの様に、修養と云ふと、其の人真似の出来ぬ奇術でも習得することかと心得て居る。全く東寺の門に集つて居る不具者を賞玩したり、盆栽いぢりに浮身を賣して居る形ちや。やがては見厭がするだらう。人間以上のことをする奴が若しあつたなら、夫れこそ化物だと氣がついたときはもう遅からう矢張り物は素直、人間は人間らしいのがよさうに見える。禪家に世尊拈花と云ふ一則がある靈山で釋尊が說法せられたときに

満座の大家を前に置いて、其處にあつた花を取つてつと差出して見せられた。誰も其の意味が分らんた、只一人迦葉尊者がにつこり笑はれた。そこで釋尊は、吾に正法眼藏涅槃妙心實相無相微妙の法門不立文字教外別傳あり、應訶迦葉に付囑すと云はれて、之で禪が釋尊から迦葉尊者に傳はつたとせられて居る。長々と文句を並べるとひどく大事さうに見える。然し之とて世間並はづれたものではない。只氣が付かぬから玄々微妙に見えるだけだ。其の證據には白樂天と鳥窠の道林禪師との問答には白樂天が佛法の大意はと聞いたのに對して、道林禪師が極簡単に、諸惡莫作衆善奉行と答へてある。そんなことなら三歳の孩兒も知つて居ると云ふたら、三歳の孩兒も知つて居るが、八十の老翁も行ひ得ずと來たので、ギヤノンと參つて居る。雨の降る日は天氣が悪い兄キヤノ公より年が上、之れさへ分ればよいと云ふ話もある。平凡中を馬鹿にはならぬ。本營の平凡が何時迄見ても見厭のせぬ所ぢやなからうか。

我輩の尊敬する知人に平凡の偉人と云ふことを高唱して居る人がある。平凡の偉人と云ふのは平生は馬鹿の様に、而かも何時も變に應ずる用意が出來て居つて、物に凝滞せぬ人だと云ふて居る。面白い

見方だと思ふ。只平凡は何處迄も平凡にして置いた方が一層よくはないか。別に偉人などと餘計な名前を付けるのは寧ろ平凡味を害するものだ。平凡が面白いと云ふ人も世間にはないではないからう、平凡の偉人など云ふと其の面白味がなくなる。道は長安に通ずで、一等道路もあれば二等道路もある。等外道路など自動車は通らぬ、そこを自動車で乗廻さうとするより草鞋穿きで行くのが眞の利口だ。之は勿論偉大でなくて平凡だ。所で此の平凡にならうとする人の少いのが今の世の中の病氣だ。道は遠きにあらず、而かも只一筋、迷はぬ様に御用心くとも云はうか。

◆岸さんの事

遠野 達 雄

朝鮮銀行の岸發行課長は、ウイスキー通としては恐らく全京城での第一人者だらうと云ふ者がある。會て一匡社發行國家及社會誌上にアルコールと絶交した一文を寄せた事があるが、情思綿々として轉た讀者の同情を買つたといふ事だ或る人が『何もアルコール君と絶交なさる必要はないぢやありませんか』と忠告すると、

『イヤナニ絶交したらどんなに悲しい氣持になるであらうかと想像して書いてみたまでのことさ』と涼しい顔をしてゐるので、其人啞然として二の句を次げなかつたさうだ。

氏は又非常な讀書家で、怪しい諷諷物なんぞを讀んでると一世紀も二世紀も後れるからとて一切原書の外手にしない主義ださうな。金(ゴールド)の智識では權威である。

人は自ら生きる

京城醫專教授  
醫學博士

佐藤 剛 藏

凡ての病氣は其病原を檢索し之を撲滅するか、又は其病體を除去するかの方法を取つたならば其病は自然治癒の妙機で治癒するものである。自然治癒は想像以上に生活體内に行はるゝもので軽い病氣は略此の自然治癒で快癒する、又重い病氣であつてもこの自然の妙機で治癒することがある、少くとも輕快することがあるから、この點は大に感謝の意を表せねばならぬ誠に有難いことである。よく世の中にあることが名醫が匙を投じたといふ大病が得證の知れぬ民間療法でヒョククリ輕快するといふやうなことも偶々この自然治癒が參與したものであらう。肺結核は難治の病であるとは誰も知つて居る、肺が病原たる枯核菌の爲に犯され、肺の一部が破壊せらるゝのである。然るに自然治癒の妙機が之に加はると結核病體の周圍に強い硬膜が出来て其病體をスツカリ取圍んで終ふ。而して肺病は治癒する。其人の死ぬ時は枯核と何等關係の無い他の病氣で亡くなつて解剖して見ると始めて以上のやうな病體を發見するといふやうなことは屢々ある。胃癌の如きも恐るべき病氣で先づ不治の病とせられてあるのが不思議にも其コブが自然に軟化しグニヤグニヤになつて終ふといふやうなことも無いでは無い。これ等は全く自然治癒の御陰である。

又病氣が治癒するといふのは元々身體自身から出るであらうこの

例を述べよう。平たういへば病氣は其人の身體から出て治癒するものも其人の身體自身より來るものである。モウ一ツ分り易くいへば人の身體は病氣にもなるし、又どうにかして回復せようともして居るのである。今此處にキツを受けたとする。このキツをば醫者の方では良く消毒して無菌のガーゼで掩ひ、綿を當て、縛帶する。毎日この事を繰返すとこの單純な處置でズン／＼とキツは治癒して行くのである。以て牛體には如何に治癒の力があるかを證明し得べく旁々身體自身が治癒するのであるといへる。今病氣を戰爭に比ぶれば戰爭で火花を散らすのは恰も病氣で、熱が出たり腫れたり痛んだりするのと同じである。生體が病原たる敵に打勝てば病氣は快癒し、又病原たる敵が生體に打勝てば結局生體は死を招く。大體に於て生體は其病原を撲滅し敵に對して勝利を得んが爲に火花たる發熱其他の病狀を惹起するのである。此生體の治癒せんとする爲に招來する病狀は之を生活反應といふ。この反應の存する間は病の治癒の見込があるかと考へて差支ない。而してこの生活反應は餘り多過ぎても又少な過ぎても良くない。何れの場合も病氣の治癒を妨害するものである。其過多なるを制止し、不足なるを補充して以て病を處置し治療を加ふることは常に醫の務むる所である。

醫者治病之工也とかいふことがあ

るが然し醫は工とは全く違ふ。醫者が病氣を治療するのは大工が破れた家を修繕するのは其趣旨に於て異なるものだ。家の修繕では壁が落ちたらそれを元通り塗ればよい、屋根が破損したらば之を原狀に修繕すればよい、硝子が破れたら之を嵌め代へればよい、早速元通りになる。然るに醫者の病氣を治療するのは全然之と趣を異にして居る。腹がくだつたら早速下痢止めの薬を用ひれば治癒するといふやうな單純のものではない、熱が出たらば下熱の薬を内服すれば直に回復するといふものでもない。腐敗したものを食べれば自然の妙機は之を體外に出さうとして下痢を惹起さしめる、時として腹痛を伴ひ、或は嘔吐するのは全く必要あつての事で、一刻も早く腐敗不用分を體内に置かまいといふ妙機に外ならぬ。そこで治療としては下痢を止める薬を用ひず寧ろ下痢を内服して其腐敗不用分を押し出すのがよい。即ち之が自然治癒を助けることになる。其後食物に注意を拂ふならば獨り手に身體自身で治癒する。熱發に對する下熱劑の内服も以上と同理である『一に看護二に藥』といふやうな事や『自然は病を治癒せしむ藥は然らず』といふやうな意味の古語は誠に味ふべき事で、偶々自然治癒の一大妙機が生體に於て營まるゝものなること、而してこの事は病氣の治癒には極めて大切なことであること等を具體的に表示してある。要するに醫者は自然治癒の補佐役ではあるまいか。又醫者は病を處置し得れども之を治癒せしむることは出来ない。治癒は生體自身の營む妙機であらう。



英語の先生

京城日報社

泥谷西疇

私は大變な晩學で、お茶の水の學校に入學したのは、二十七歳の時であつた。田舎で學校の校長をしてゐたので、入學の時にはフロック、コートに山高帽で顔には天神髯を蓄へてゐた。同時に入學した學生は私を先生だと思つてゐたさうで、後で度々調弄はれたものである。

英語の時間になつて教場に行つてみると、飛白の羽織に小倉袴の學生らしい若い先生が耻かしさうに教壇に現はれた。最初の時間で教科書はないし、先生は一人一人に是迄讀んだ書名を聞いて一々手帳に書き取るのであつた。スケッチブックを讀んだといふ者もあり、アレビアン、ナイトを讀んだといふ者もあり、中にはセヴン、クラシックスの名を擧げる者もあつた私はスキントンの萬國史の初めの方とナショナル第五讀本を半分ばかり教はつただけで、今聞くやうな書物は其名を耳にしたとはあるが逆も私などの力には及ばぬものと思つてゐた。それを今同級生の口から聞かされて私は果して皆と一緒にやつて行けるだらうかと心配でならなかつた。

それから先生は、入學試験に出たソレム、スタイルの土に就いて質問を試みたが、之に對する答は不完全なものが多かつた。私は聊か案外に感じた。こんな事が一通り済んで、先生はサア、ロージャー、ド、カザアリといふアツイソンとステールと

の共著を教科書にするから次の英語の時間までに丸善から買つて来て置けと命じた。一度では聞き取れぬほどに書名が六かしいので一同は互に顔を見合せた。

先生はドチラかといふと、小柄の方で顔は大じやんこであるが、才氣に充ちた眼の冴えた人であつた誰か何處から聞き出して來たのか仲間の話によると、昨年大學の英文科を出た秀才で尙ほ大学院で勉強中であるが、學資の補ひに此處の講師に出ることになつたのだといふことで、報酬は確か參拾圓とかいふことであつた。

次の時間には六かしい書名の説明などを承はつて、サテ譯讀といふ段になつた處が、この前高尚な書物を讀んだと稱してゐた學生達も冒頭のワン、メンテンスの意味が碌には解らなかつた。私は二度吃驚をしたが、先生も頗る意外に思つたらしかつた。何んでも初めから二三十頁も進んだ頃には、私の最初の懸念は全く杞憂に過ぎなかつたことを發見した。之と同時に多數の學生から餘り六かしいから教科書を替へて呉れといふ注文が出た。次の教科書はゼノファンのメモラピリアであつた。是れも一二箇月で、まだ六かしいといふのでスペンサーの教育論を讀むことになつた。先生も能く生徒の學力の乏しいのに驚いたらしく、遂に一時間置きにツイクソンのイングリッシ、コムボッシオンを購ずることになつた。

其頃の高等師範では最初の一學期間、生徒を假入學にして置いて、其成績によつて本入學の許否を決するのであつた。地方の師範學校で一週わづか二時間か三時間か不完全な教師の下で學んだ英語の學力は實に憐むべきものであつた。他の學科では相應の力を有してゐる者でも、英語にかけてはお話にならないのであるから、學期の終りの近づくに従つて一同は不安の念に疊はるるのであつた。

徳富蘇峰の郷里から來た一學生は漢學が出來て詩文に於ては級中の白眉であつたに拘らず、其英語と來ては氣の毒に堪へざる状態であつた。私も見かねて度々下讀みの手傳をしてやつた。學期の終りも目睫の間に迫つて來たので、此學生は憂慮の餘り一篇の陳情書を草して之を先生に呈した。田舎の學校で良教師のなかつたこと、小學校に奉職中に獨案内などで勉強して漸やく入學試験の間に合せたこと、若し實典によつて本入學の恩恵に浴することが出來れば、此夏期休暇中に必死と英語を勉強して第二學期以後は書つて先生の眷顧に酬ゐるといふのであつた。實に見事な文章で惻々として人の同情をそよめるものであつた。陳情書の効果かどうかは分らぬが、此學生は幸にして本入學を許され、今では一廉の教育者として立つてゐるのである。

×××××

この英語の先生が他日の夏目漱石さんであらうとは當時誰一人想像し得る者はなかつた。漱石さんの負け嫌ひは有名であつたが、漱石の雅號に耻ぢないほど齒の美しい人であつた。



藝 術 小 觀

京城地方法院長 齊藤庄三郎

文豪夏目漱石氏は其著草枕に於て氏の懷抱せる藝術觀を述べてゐる其一節に曰く、

『智に働けば角が立つ。情に掉させば流される意地を通せば窮屈だ、兎角人の世は住みにくい住みにくさが嵩すると安い所に引越したくなる、どこに越しても住みにくいと悟つた時。詩が生れて書か出来る。人の世を作つたものは神でもなければ鬼でもない矢張り向ふ三軒兩隣りにちら／＼する人である。唯の人の作つた人の世の住みにくいからとて、越す國はあるまい。あれば人でなしの國に行く許りだ人でなしの國は、人の世よりも猶住みにくからう。越す事のならぬ世が住みにくければ、住みにくい所をどれほどかくつろげて、束の間の命を束の間でも住みよくせねばならぬ。茲に詩人と云ふ天職が出来て、茲に畫家と云ふ使命が降る。あらゆる藝術の士は人の世をのどかにし、人の世を豊にするが故に尊い。住みにくい世から、住みにくき類ひを引抜き有難い世界をまのあたりに寫すのが詩である、畫である。あるいは音楽と彫刻である』云々と

實に至言である。

生活を藝術化し藝術を生活化して兩者の融合渾一に努むることは、

藝術家としての丹き至純の仕事である。されど世に藝術と實生活とを劃する一線は儼乎として存在してゐる。こゝに於て實生活の煩瑣束縛は藝術によつて淨化せられ拂拭せらるゝのである。名匠が自己の心に在る信念を抛出して、其心靈の影を結晶せしめた偉大なる作品に接する時、吾等はあらゆる雜念を離れ、俗念を淨化せられ、其對象を通して、天地萬有と冥合し無何有の神秘郷に暫くの間なりとも遊ぶことを得るのである、此遊離の心境こそ實に藝術の賜物である。

文學にせよ、繪畫にせよ、彫刻に

◆新聞界雜筆

高山 孝雄

▼經濟記者の中で頭の善いのは別府君(日日)だといふ噂がある、どんな大きい問題でも、要領を二三盟買すだけでサッサと引揚げるが、書いたものを見るとチャンと急所を押へて居る、全く安心して話が出来るといふ評判だ。

▼朝新經濟部長の西本君がヨシタ慶天出身の立派な男であつたが、寧ろ同社のために惜まざるを得ない。

▼日目をヨシて西鮮日日に入つた伊集院君が今度京日に戻つた。今後本誌にも大に書く筈だが、本誌には『刑事部室のぞ記』を寄せて

せよ、其製作に於て、又其鑑賞に於て、之が事に與るもの、心をは法意禪悅の靈妙境に導き行き、神秘なる、無邊際の際堂に遊ばしむるものである。半折の小幅でも短き歌曲でも將た小彫刻にせよ、それが苟くも眞の藝術の眞義にかなつた作品ならば吾等の生活に醍醐味を與へ解脱を惠むのである。

藝術は究竟人生の救濟である。然るに現今の藝術家の態度を見るに世界の變化や時勢の變轉に對して殆むど無感實没交渉で、徒らに技巧の末に離脱し、又は古人の模倣のみに努め新起の社界の種々柱に對して鈍感なるのは藝術の根本義を忘失したものと云はねばならぬされば藝術を一個の遊戯とし娛樂として取扱ひ特に古人が敬虔なる信仰の對象物として製作したる宗教藝術を何等敬虔の念なしに單なる好奇心と考古癖とを以て取扱ふが如きは藝術の尊嚴を冒瀆するものである。

くれた、同君の面目が眼に見るやうに思はれる。

▼木浦新報編輯局長の河村君が愛兒を亡くした、謹んで弔意を表する、氏は近く本誌に『愛兒を憶ふ』一篇を寄稿するとなつて居る

▲京日平壤支局長の矢橋君が今度副社長といふ名義で平壤毎日に入つた、非常な快腕家だといふ噂がある。

▲朝鮮經濟日報の加納君が朝鮮文講義録(生學程度)を出す、時節柄歓迎されるだらう。それから毎申編輯長伊藤韓堂氏がこれも朝鮮語の講義録を出すと聞いて居る、同氏は朝鮮語の一權威だ、適才適所といはねばなるまい。



魔 術 經 濟

朝鮮殖産銀行 守屋三葉

重くもないと言ふて輕そうでもない病氣にかゝつてごろごろして居ると何となく人生を茶化して見たくもなる、今日雜筆社から原稿催促の端書が飛び込んで来たときは行詰つた朝鮮經濟界のことなど考へて居り、それに頭の隅から題目の様な思想が浮び出して來て頗る興の湧いて來た最中だつた。

原始文明の研究や野蠻人の生活状態の研究に一寸頭を突込むとすぐ魔術と云ふものが彼等の生活の生命であり、あらゆる推理の原則であり風俗習慣の根源であることが明かになる彼等の經濟生活も亦御多分に洩れない、資本主義でもない、機械作業でもない、大量生産でもない、一切は魔術による經濟だ。

稻が實るのも何のことはない魔の力だ、人力などは與り關する所ではない播種祭だの收穫祭だのといふ儀式がシャマン (shaman) といふ特權知覺の所有者によつて執行せらるゝ、シャマンは首長であることもあるが必ずしもそうではない一種の靈感の所有者で大抵は世襲だ、大に崇められる。このシャマンと魔との間の感應で五穀の生育が決定せられるのである、この頃の様に御天氣が続いて水に不足を來す様になると早速雨乞の魔術をとり行ふ、水利組合などはとんと必要ないのだ、ところがこれがよく効を奏するから妙だ、學者

は多分これはシャマンは雲の性質を心得て居てこれを秘傳として子孫に傳へるのだらうと言つて居る原始社會には經濟といつたところでは農業に類するものが大部分だがこの仕事はすべて魔術によつて行はれて居るから面白い、此等の魔術は總稱して Vegetation Cult といふ、どつかの野蠻人で水牛を常食とする部族がある水牛がとれなくなると水牛祭をやる、これも魔術の一種である、こんな種類の儀式に限つて亂舞亂淫が必ず伴ふこれも無意味のことではない人間の生殖が稻や水牛の生殖繁殖に魔術的に影響すると信ずるからである、これを學者はパーテシペイションの法則 (Law of Participation) といふ、感應の法則とも譯すれば意稍々近い。先づ魔術經濟の大體の概念では上述の様なものでござうると氣易い

貧乏論の事

富田夏雄

▲前號河西氏の貧乏論を讀むと氏の貧乏に對する造詣の深きよりも之に對する呪詛の熱情に、聲へずホロリとさせられるが。

▲その河西氏が一夕斯道の先輩工藤書店主を叩き大に貧乏論を論じたものだ。が何しろ工藤氏は其學風が英國系の論理派に屬するものであり、河西氏のは其體験から

話で、大震災の結果資金が廻らぬといつて騒ぐ迄のこともしし工事を中止するの經費を節約するの社員を首切るのなんといふ世話はとんといらぬ、唯シャマンあるのみだ、シャマンが白い髯をしいて二三度手を振り廻せばそれで萬事解決だ。

今の經濟界にも大正のシャマンが欲しい、御互の小さな理智では生ぬるい膏藥ばりの其の日暮しにも飽いた、このシャマンが南山の頂で二三度手を振り廻したが最後朝鮮には資金がどんどん流れこんで來るあらゆる事業がムクムクと起き出して來る抱株にも値が出る手形が蘇る、どこの重役さんも惠比壽顔と來たら、どんなものだらう、どんなものだらうも無い、本町通りに黄金の雨が降り鐘路街頭銀の雪が積むといふ次第第一助かるのは女の顔かびのびして美しくなることだ、結局もとの李阿彌になるは必定だが根がシャマンの仕事だ、魔術經濟だ、魔術經濟は貯蓄經濟の要素を缺くが原則だ、江戸つ子の言ひ分ではないが、宵越の金は遣はネイといふ方がほんとうは人生の自然なんだから。

得來つた所の所謂體験派哲學なんだからいつまで論しても鬼のつかう道理はない。

▲工藤氏窮餘の一策として平生愛讀するところの泰西名著數篇を示して之を河西氏に借與することゝした。

▲河西氏一先づ夫れを家に持歸つたが、慨然嘆じて曰くサ『いくら名著を讀んだつて貧乏神は逃げて行きやあしねえや』と臺詞と共に一流の思ひ入れ宜しくあつて幕。

金剛山に就いて

洋 畫 家 高 木 背 水

私が初めて金剛山を探勝したのは明治卅五年であつた。當時鐵道は京仁間にあつたばかり、朝鮮語を知らぬ自分は英語を使つて切符を買ふた、其他非常な困難と不便を冒して五月初めから七月中旬迄かゝつて山でも峯でも谷でも詳しく見て廻つた、賴山陽の耶馬溪紀行文を讀んで飛び付く想ひに自ら彼地も再三探勝したが彼處は文藝が非凡の著想と靈妙な筆の働きに依つて美化されたる事を看取したが一度金剛山に踏み込んで見ると自然其のまゝが文神であり詩聖である。雄大な壯嚴な、神秘的な谷間の流れの邊にひと息休んでると一陣の柔かい靜かな冷風が吾身を包むかと見る内に白い霧が四方を圍むで明るい乍ら一寸先きは見へなくなる。聞ゆるものは溪流の響きばかりで一層物凄しい。バルラダが出て來るかデヤナが現れるかなどと空想に耽つてると何時の間にか自ら自分が神話中の人になつた氣がする。

聲を博し東京に取敢へず畫室を新築し交際場裡にも出入せねばならぬ身と成り、やれ何々會委員とか評議員とか面倒臭い事限りがない勿論専門上には同情の熱血が燃へて居るが社交上の事や事務類似の事は持つて生れた不適任である。其れ迄既に二回も海外諸國の名勝や絶景は皆踏んで見たが何うしても金剛山が勝れて居る様な氣がして堪らぬので斷然意を決して大正三年の夏再び朝鮮に渡つた。此歳八月京元鐵道が開通し元山長蘆間の船便も開けて昔よりはずつと良くなつた。此の時三ヶ月程探勝して夏より秋に變り行く絶景の複雑無限な美に打たれて東京の新畫室も名利も捨て、朝鮮に土著した、金剛山探勝は三度や五度往つた位では眞の妙味は決して解るものではないと悟つて傾斜地を下し畫室住宅を新築し、家族を招いて自分一代かゝつて彼の靈山を研究し開發し、又世に紹介せんと決心した。其後大正九年春より歐洲戦後の美術界を視察に出かけ翌十年夏歸朝した。其の間ついでに豫て案内知つたるアルプスやら伊太利の諸地や英國内の名勝、ライン附近などに世に知られた場所を残らず足を向けたが矢つ張り金剛山は群を抜いた世界の名山である事は、いよいよ、確かである。

今試みに外國の名勝と比べてみると、ライン河も相當に景色に富んで或る地點では川舟の船頭が耳に栓しなれば通られぬと云ふ傳説がある、其處には美しい女神が棲んで美妙的な音楽を奏する其の音に心を引かれて舟人は舵を誤つて舟を岩石に打ち突けると云ふ。伊太利のカポリ島の物語りから譚訛した話しであらふ。然しあの位な景色は美しいには違ひないが吾國で吉野にも木曾にも其他にも澤山ある。アルプス山の景は人間にたとへるとデコルターを著した派手な装いの女連がオーゲストラの樂に伴ふて一大舞踏でもしてる様なもので、モンブラン山頂の氷雪に朝日を受けたのは西洋婦人の粉粧に似てる、湖水の面に山影の投げたる状や澤山の山々が重つて大袈裟な點は壯觀で華麗であると評する事は出来る。北米のヨセミテ溪流も二十餘年前から大騒ぎとなりあらゆる廣告もせられ金の有るに任せて設備も出來てるが雅俗混合で能く米國人を代表してゐる。余輩は二度も三度も行く氣にはなれん。關島の奥地ルインドキャンデーは如何にも翠滴る常夏の熱帯氣分で轉る鳥の聲四時絶へ間なき花のいろ／＼佛者が教へた極樂淨土を想はしむるが此れは居心地が良いと云ふのが主で景色としては主題が餘り簡單である。金剛山に至つては湖水がないだけが物足らぬが其他の點に於ては全世界の美の種類を集めたと云ふても過言ではない丹青の道に終生を托した吾身は土著して既に十年になるが未だ一枚も眞の金剛山の景を畫面に表し得ない、探勝の足の回数が五回が八回、十回、二十回と重なるにつけ美妙的な深味と範圍が何處迄有るやら限り知られんと思ふ。

再三再四探勝せられん事を諸君に切望す。

思ふことよ京成こよ立派な高踏

硬軟とりどり

古河鑛業出張所 水谷九二吉

いろは順

日本で古くから使ひ慣れてると云ふものゝ、又電話番號簿や各會員名簿は勿論何にでも彼にでも廣く一般に用ひられてると云ふものゝ、いろは順は實に不便が尠くない、之は宜しくABC順に改むべしだと云へば或は太行社一派や有田晋松氏から手酷く叱かられるかも知れぬが、敢てABC順にするに及ばぬ、國産アイウエオ順を採用したら宜いと思ふ。

早い話が電話簿を見て伊藤や井上の『い』が最初にあり鈴木や須藤の『す』が最後にあるは直ぐ解るも、伊田の『つ』と近藤の『こ』が下ノ邊りにあるかは容易に見當付かず、大概の人は索引を見るか或は一度いろはを口誦んで始めてオーダーの見極めを付する有様でないか、其煩雜其時間の空費！畢竟之はいろは四十八字のオーダーを暗誦し直感するの困難から起つて来る、之をアルハベット順にすれば廿六字のオーダーで済み、更にアイウエオ順にすればアカサタナハマヤラワの十字のオーダーに依つて全體五十音の字順を比較的迅速に覺知することが出来ると思ふ。勿論オとワ、イとキの如きは一方に纏めるとして。國難に直面した今日だ、重苦しい舊套は少しでも脱ぎ棄て、舊地に能率増進を計るべきだと考へる。

經濟論

甲『京城の實業界の人々が發表する經濟論は實に感服しないネ』

乙『感服するしないは御自由だが官界の人々から出る政治論に比較すると或は見劣りがするかも知れん、政治論には時々敬聽に値する大文字があるからナ』

甲『最近氣付いた一例を云つてもフイシャリーのネオ、クオンテイテ、セオリーを履違へた様な物價論の如き又如何なメルカントリストも兜を脱ぐ様な貿易論の如き、今時よくもこんな議論を發表し得るかと思つて寧ろ其大膽に驚くネ』

乙『そう責めるナヨ、無理からぬ事情もあるサ』  
甲『京城は政治都市であつて商工都市でないから人材政界に多しと来るかネ』

乙『そうじゃない、そうじゃない實業界だつて立派な人物が澤山ある、決して官界に見劣りはせぬ、が京城の環境が外人と餘り商賣上折衝する機會が尠く自然語學力が減退する事實がある、従つて外國雜誌や新刊書を讀むことがツイ疎そかになり易く世界經濟の大勢から遠かつて来るのは免れぬことだ、それに官界の様に年々數人宛洋行して絶えず新智識を齎らすと云ふ様なこともないからナ』

甲『要するにモット讀書でもして新智識を吸入せよと云ふことだネ』  
乙『まあそなたネ、此點で何時も

思ふことは京城には立派な高商も高工もあることだから實業界の人々も此等と連絡を取つて新智識吸入機關を作つたらどうかとねエどうだ、そう思はぬか』  
甲『さアどうかネ、そこまで進んでやる人があるかしら』

エンゲイ花

標題に従つて軟いところを申上げ、藝者に線香を付けることを京城では新聞でも雜誌でもよく演藝花を書く、然し演藝では可笑しい白拍子が鼻下長の茶ピンを提へて『甲斐性なし』『兵六玉』と大砲小砲を散々浴せかけて、ヤット物にした一日のエンゲイ花だ、必ずしも芝居や活動に行くとは限らぬ間夫は勤めのうさ晴らしもあらうし何處へも行かず饒舌と間食で一日暮すのもあらう。

されば之は演藝花でなくてエンゲイ花即ち豫約せられた花でなければならぬ。

尤もエンゲイジ花であらうが演藝花であらうが我々プロには餘り關係はない、否々サラリーやボーナスのエンゲイを付けて呉れる人があれば此上ない結構だが。

森さんの事

鹽谷貞吉

殖銀の森理事はなか／＼手紙をかみ、タマに書いた手紙を受取つて見ると、その措辭といひ筆蹟といひ實に群を抜いて居る、手紙の粗製濫造をやらぬ人だけに、返へす方より来る方が多く、同氏のホケットには負ひ目の手紙が何時もぎつしり、丁度街に立つて居る郵便ポストのやうだ。



忙中閑筆

自然の公平と言ふ事

不二興業社長 藤井寛太郎

私は先天的に樂天主義で人生常に悲觀して暮す程不幸で亦隣人をも不快ならしむるものは無かつと思ふ。もとより人生は不如意の事のみで時には世を呪ひ天を怒む様な事の起り來るは屢々であるが是れが人生の常と思へば何でも無いのである。私は事業を遂行する時に於ても常に自然の公平無私なるを深く感ずるのである。先年鴨綠江口で四千町歩の干拓事業に著手する時、此地方は朝鮮の西北端で氣候も頗る寒い、我々溫帶國に生れたものとしては非常な嚴寒地の様に思ひ米の如きものも到底南方同様には出來ぬものさ考へて居たのであるが、一たび事業に著手して見ると一反歩から概が八石、玄米が四石五斗も收穫し得られるのを見て其意外に驚かされたのである。勿論此地方は朝鮮でも助價が最も貴く收穫の多い事は聞いて居たのであるが其實際に接する迄は其實實が分から無かつたのである。段々農場の試験成績の重なるに連れて之を専門家に報告したが三四年間は中々信用して呉れぬ。自分でも十分に其理由が分らぬ先づ其土地が鴨綠江の上流より幾千萬年の大森林の落葉が堆積腐蝕した沃土を流出し來り鴨綠江口に沖積した肥沃地である爲であろうと思ふて

居たのである、即ち收穫の多い原因を主として地味に歸して居たのであるが若し地味の關係とすれば幾千町歩の大面積は兎も角小區域ならば南鮮にも決して之れに劣らぬ土地が少なく無い而かも到底北方の如き多收穫は得られぬ事を不可思議として研究すると始めて此大自然の公平無私なる事實に心付いたのである。夫れは此の地方の嚴寒時は屢々零下參拾度の低温を見るが一たび米作季の五月ともなれば所謂大陸的に氣候は激變して日中の溫度は内地よりも高い九月末米の相當に稔る頃迄は何等寒地では無い、特に北方の常として植物の發育が非常に迅速で南方で三ヶ月を要するものは北方で二ヶ月で發育する而かも北方に進むに隨ふて夏季の日が永く即植物の發育に必要な熱、日光と言ふ様なものは其積數に於て遙に南方よりも天恵が多いのである、是れはただ北方計りで無く南極に近い南方でも同様であろうが北半球に於ては北に進む程日が永く夏季は夜の無い處さへあるのに考へても大自然の微妙なる公平に驚かざるを得ぬのである。我々は只何と無く南は温かく五穀能く登熟し、北は酷寒で到底農作には適せぬかの様に考へて居たが此自然の公平を知りて

1101

以來我國の食糧問題を根本的に解決する上にも非常なる心強さを感じ得たのである。現に當今米は浦鹽斯德より遙かに北方の『スペースカ』方面迄耕作せられ其收穫量は朝鮮よりも多いのである。彼の暖國土位では米が二度取れる、臺灣では米が三度取れると聞けば如何にも結構の様であるが臺灣で三度取れる米の收穫量は一反歩四石にも足らぬ土佐の二度も同様である然るに鴨綠江口の私の農場で一度に四石六斗取れるとしたら何人も大自然の公平を否定する事は出來ぬであろう。而かも臺灣で三度の米を作るには一年三百六十五日を三百八十日も勤務せねばならぬに反し北方では六月に播きて十月に收穫する五ヶ月間の勤務で足るのである他の七ヶ月は温かき室内で他の如何なる作業でも出来るのである。

若し大自然に此公平が無いとすれば世界人類は悉く熱帯に集らねばならぬ。熱帯地方では衣なども寒を知らず、飢れば山野に果實あり、生活は極めて容易であるが天二物を與へず熱帯人の文化は遙かに劣等で到底世界最優の人類たる事は出來ぬ。吾人日常の生活に於ても亦然りて富める人々の出入に自動車あり食ふに美味あるも飽けば山海の珍味亦た澤庵茶漬に如かず、運動の不足は體内の糖分過剰が糖尿疾となり、鹽分過剰が腎臟病となり、脂肪分過剰が心臓病となる。富めども勤勞無き生活に健康は伴なはぬ。健康無き人生に何の幸福がある。私は常に思ふ身に何等の財産無く終日營々として正しき労働に従事し日暮れて歸る陋屋にも一家團樂の樂みあり。日々榨る汗と脂は其身の健康を加へ

一杯の濁酒に陶然とし。一碗の麥飯太宰の珍珠に飽り。腹滿つれば腕を曲げて眠る快眠熟睡眞に樂箇中にあり王侯我に於て何かあらんやでは無いか。大自然の公平は決して幸福を富者に獨占せしめず。千萬長者一朝の失敗五百萬金を失いて鐵道往生を爲せる大馬鹿も寧



夏 日 雜 筆

藤田傳三郎翁の事

京鐵道評議員 足立丈次郎

ろ富者の心理を代表せりと言ひ得べし。然るに世人徒らに此不幸な富者たらんと欲して勤勞を厭ふは眞に幸福を求むる所以で無く亦大自然の原則に反するものでは無いか。妙に忙中閑筆をものして京城雜筆の戲しき催促を免れた事を喜びます。

故藤田傳三郎翁が二代の富豪であり納倫の事業家であつたことは云ふまでもない。翁の事業家としての幾多の美質は已に多く紹介されてゐるが、私は翁に親灸した一人として、成るべくその興味ある方面に就て、二三記してみたい。

翁は天成の事業家で、常住學臥、業務に親しんだ人だけに、家族ばかりの團樂を樂んだやうなことは殆んど絶無であつた、が保健の必要から、醫師の勸告に従ひ、晝食後の一時間だけは必ず睡眠するのを例として、此の一時間の休眠は如何に高貴の客があつても、如何に緊急の要件があつても、それに構はず嚴重に履行したもので、こんな事にも堅忍不拔な意志の閃きを見せたものである。私は同家に出入した當時、翁があれほどの地位と資産とを擁して、しかもこんなに多端なる業務に追

はれて生活してゐるのを見て深く感じ「家族團樂の樂みは翁のやうな大富豪よりも却つて我等のやうな清貧の者に恵まれてゐる」と家人に談つたことがある。

翁の骨董道樂は有名なものだつた家に蔵する珍器、古書畫の中に、萬金の價値あるものも、數へ切れぬ程あつた。總額にしたら、數千萬圓に上ることと思ふ。翁は又能樂に趣味を有して、能舞臺を置き、能衣裳を蔵し、自ら演能することがあつた。又舞を京都の老妓に習つて中々達者なものであつた。又牛を愛し、牛の置物を好んだ。翁の歿後郷里山口に建碑の企てがあつた際、其の費金を醸出した知人一同には、同家から臥牛の置物を贈つた。それは翁の愛蔵した臥牛を模造したもので其の遺愛を分つる主意に出たものである。

翁と晚餐を共にし、席上其の雅號を尋ねたことがある。翁は微笑して答へた。『私の雅號は鐵橋云ふのです』鐵橋とは餘りおかしいと思つて、一同が更に其種田をきくと、翁の答へは簡單だ。

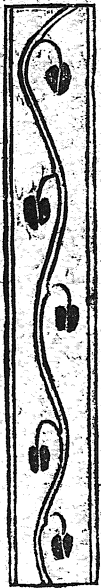
『大阪の高麗橋は日本最初の鐵橋で、私の手で受負つて架設したものである。依て鐵橋といふ雅號を思ひついたので』と當時私も其席に居て此説を聞き、翁が徹頭徹尾ビジネス的なのと、其の雅氣に富んで氣取らないこととに感服した。

後ち或時、翁の雅號を署名するの必要を生じた事があつた、が其時は鐵橋では餘りに俗なので、強いて翁の許諾を求めて網川と書いた翁の邸が網島の川添ひに在るからである。

◆文壇一夕話

平 田 久 雄

朝新の釋藤氏は、あれで少年時代却々の美少年であつたさうだ▲何んでも外出などする時は、紫の大振袖を、袂ゆたかに著なしたとかいふ噂もある▲モルガンお雪がポーツとなつたといふのも、ほんとうだらう▲美少年といへば、朝鮮及滿州社長の釋尾氏も、頗る非常のヨカ稚兒で、ズイ分豆腐屋の娘や、紺屋の後家どんがヤイ／＼と騒いだものさうだ。尤もこの方は少しはカケ値があるかも知れぬ。土蔵がゴム人の告白やからナ▲そこになると、京目の河谷氏は確に美少年だつたらう。今でも首は少しフトいが、なにそれさへ我慢すると、却々可愛い顔だ



偶 感

宇治川の會遊のこと

京城第一高等女學校長 坪 内 孝

山嶽の雄大、河海の壯烈、吾人は山水に臨んで自然の大偉力に敬虔の念を持ち、而もその懷に抱かれんとを希ふのである。仁者智者にあらすとも誰れか山水の雄々美とを愛好せぬものがあらうか。悠久にして絶ゆることなきは水である。行く川のながれは絶えずして、しかももとの水にあらずとは方丈記巻頭の辭である。大井川かはらぬ水にかけ見えて今年もさける山櫻花といふ感は強ち景樹ならずとも、水に對して起るべき感でなければならぬ。

余は一歳宇治川に沿つた旅宿に凝々として絶えない水の音を聞きつゝ一夜を過したことがある。宇治川それは余の忘れんとして忘るることの出来ない河である。源三位頼政はこゝに討死し、源九郎義經こゝに三軍を叱咤し、梶原源太景季はこゝに先陣を争つたのであるこれらの勇壯なる史實は余の感を深からしめて、宇治川の瀾の音を忘ることの出来ないものとしたのである。更らにこの地、この川が圓通により、朝顔日記によつて餘々余の感を深からしめたのである併し余の腦裏に浸染して深く銘せらるゝものは源語宇治の巻の洄想である。

去年公會堂で名村氏の演説を聞いた事がある。理想味の勝つた、抑揚に富んだ、さうして莊重で、純真で、句々悉く人の肺肝を突くやうなあの雄辯は全く障礙を解はしてしまつた事を私は記憶してゐるその名村氏に原稿を依頼すべく蓬萊町一丁目の大毎支局を訪れたのは六月十三日の午後三時頃。見ると、あの廣い編輯室は只だがらんとして、丸裸の得體の知れない運動をしてゐる人が二三人ゐるばかりだ。

名村氏の事

河田 讓 治

『名村さんはもうお歸り?』と聞くと、丸裸の一人が『私が名村です、何か御用?』さてはこの俊敏そのものゝやうな小兵の裸男が、あの名村氏だつたのかと私は氏の輝一つの異様な肉體をジロ／＼見る。氏も裸のまま不動の姿勢で『やアこんな容子でどうも』と初

は吾人と聊か異れども源語最も可憐なるは浮舟の君であらう。道徳の見解と立脚點とを異にした當時を、後世の標準を以て律することは蓋し妥當の説ではあるまい、浮舟の君が煩々悶々遂に宇治川に投身せんとして、欄に憑りし時果して如何なる感ありしか、さもあらばあれ紫式部が筆致はこゝに至つて極まれるものにあらざるか、手習の君は浮舟の君の後身である、彼れは如何なる浮世の波に漂はんとて、果敢なき生命を繋ぎ止めしか。偶々今春大同江を下つて宇治川を想起して止まなかつたのである。

對面の挨拶をしながら

『今實は裏庭の土俵で角力をとつたところなんです』と云ふ。さて、名村氏は原稿執筆は早速快く承諾されたが、時に、と改つて『私の方からお願があるんです私の社のサンデー毎日に、松本さんに、或はあなたに朝鮮のはなしを書いて頂きたい——』逆颯甚だ急である。

『それでは社の寄稿家中、その方面に詳しい方から材料を貰つて差上げませう』

『材料ではいけない、書いて頂きたい。』

記者的機敏を以て追隨感々急なるものがある。

× × ×

やがて名村さんは、本誌は今日まで大阪屋で買つて讀んで居られた事やら、編輯には骨が折れるだらうとか、裸のまま打ち解けた話をされた。

奇抜な初對面の一つだつた。





とりとめなき記

大阪毎日新聞  
京城支局長

名 村 寅 雄

◆ だいたいこましい世態である。社(大毎)から月二度社報が来る。その来る度毎に新施設、新事業が載せられて来る、やれ放送無線電

鳩の豆喰ひ知識位ひはあつてもよさうだ、かう考へて来ると新聞記者は萬能の知識者にならにやなま、何様あんげらんかんとはしておられなさうだ。

話、やれ放送寫員、やれ傳書鳩、やれ飛行機、と次から次へと神經を刺す、ふふん又出來たナと思ふと同時に、地方に居るわれ等が興り知らぬうちに本社でこつた新施設がドシ／＼出來て行くのを見ると『おいて行かれる』氣がする。こゝへ来て一年、知らず／＼の間におかれてゐるんだナ、あかんぞ／＼、と焦らだたい、慌しい氣がする。

◆ 社で年に二三回地方の特派員を招集して會議をやる、行くたんびに社の新施設を見學させられる、この時のわれ等は全く田舎ものであ、科學の前に『成程、成程』とお辭儀をする、説明する先輩同僚は、田舎にあちや見られまいが、といった貌をする、種だが全くソノ通り、知識に、見聞に、刺戟に本舞台にゐる社員よりは十歩、百歩遅れつゝありさうだ、田舎巡りをしてゐるうちに、ひよんな柏子で納まり心地でもつて仕舞つたから取つ返へしがつかないぞ、なごいやに時勢に追はれるやうな焦燥な氣分でわれ等は今又、夏の會議に出かけて行く所である。

◆ 新聞社が科學に跟いて歩くといふか、或は新聞社が科學の扉を開くといふか、兎も角、新聞社に於ける科學的の先鞭的施設近頃の、一特異だ、勿論これ等の事業の施設には専門的技術家を要しこれを備へることいふまでもないが、新聞記者としてもこれを實驗する上に、又記録する上に科學的一般知識を吸ひ込んでおかねばならなくなつた、せむしいことである。

◆ 『野たれ死にでも新聞記者は死ねば三行の記事が出る』。こんな都々逸を讀んで『精神的』に働けた訓へた人が或る社にあつたさうである、嬉しくもある、悲しくもあるやうな都々逸である、野たれ死にするか、しないかは分らぬが、少くも死んだ上の三行の記事を、あてに働くことは正しく精神的であるに違ひない、こんな緊張した

モウ飛行機に乗つて仕事をしなくちやならんことがザラに出來てくるに違ひない、傳書鳩に通信をふくませて速達させにやならん時代も現に來てゐる、氣象の一般や、

氣分の中に尙ほ日新の科學や複雑極まる世態のいろ／＼の出來ごとを、あたまに入れにや、仕事におくれるといふんだ、新聞記者も樂ぢやない。

斯うした『精神的』な職業である點が買はれたのか、それとも地震、火事、親爺で返辭輕く尻輕く飛び出す勇壯活潑な職業ぶりに惚れられたのか、或は又『配當幾割』の社運が買はれたのか、近頃われ等の社員の家になりた希望者が恐ろしくふへて來たさうだ、新聞記者だと前觸れしても直に歡迎する家主が大々的が多くなつたさうだ、娘と家主とに認められて來た新聞記者、思へば前途多事ではある。(六月十七日)

◆ 中島氏の事

川田 喜久雄

▲ 中島司さんは容易に其書齋に入入れないさうだ。書齋の中に蘇峰學人の額が懸つてゐる。それも中島氏を激賞して名文家と稱した文句入りだから大したものだ。

▲ 曾て蘇峰氏が國民紙上菜花の、とを二回續けて書いた。中島氏は其説を深く感じたと共に、自分の郷里の菜花のことを思ひ出し、感興の卦くまゝに一篇を草して之を學人に送つた處、學人非常に喜びさせてこそ氏を激賞した手紙を寄せ來たばかりでなく、己に擱筆した菜花の記の第三回目のもを草して國民紙上何十萬の讀者に、中島氏の手紙を主題にして執筆したものを載せたのであつた。中島氏は學人の手紙を見てカラカはれたこゝろ思つてゐたのが記事にまで載つたので始めて恐縮したさうだ



# 朝鮮新聞自慢話

朝鮮新聞社

野崎真三

朝鮮新聞社の自慢話ですか——手前味噌だけに眞顔では困りましたナ。所謂獨立不羈、言論報道の迅速公正清新と云つた社是も自慢の一つでせうし、此頃初めた四段三色刷も近く開始の内鮮無線電信も自慢の一つには違ひありませんが、他社に見られない處は全員が殆ど力量以上に働いてゐる事で全員は和衷協同、二人前三人前を働いてゐます。此意味では我が社は白兵戰場でせう。巷間では我が社を停車場だと云ひます、記者の出入が頻繁だから記者は汽車に通すですッテ。或る意味ではそう

も思へませうが實は我が社が新聞記者修業の道場なので人一倍の鍛練を受け、適者はドン／＼出世して適處を得るが、不適者は國外に逸してしまふ。して見ると三年間擬乎としてゐる我輩は適者でないと言ふ證據ですかナ。

政友本黨の準幹部である代議士板山耕藏社長の旺盛な元氣と満身の事業慾や、其昔モルガンお等のローマンスで賣つた關藤四郎介副社長、長唄一番唄はぬと寢付かれぬ柔道初段の石森久彌事務に就ては自慢を申上げる迄もない。編輯局で光つてゐるのは精勵格勳、他の追従を許さない和田重義編輯局長だ、近來酒盃を絶つたが相變らず素晴らしい元氣で肩をイカらせて天下國家を論ずる愛國の赤誠は確に一名物たるを失はない。部長連

には隣隔で名高い久松白洋君、脚氣が可笑味を見せてゐる永森稔君、慶大出身の西本量一君などが光つて居るが、虚無的な思想家としてロシヤが大好きな永森君の斗酒敢て辭せぬ深酒も有名だ。朝鮮文壇では相當に名を賣つてゐる三田郷花、松本輝雄、寺田光春の諸君も居る。運動競技では野球、庭球、ピンポン、ボート何でも來いの松村正彦君も居る、商況部長の田山贊平君は當年のターさんとして花柳界に艶名を残したが遂に頭がヘンになつて目下總督府醫院に病氣

## 編輯室漫記

河井秀雄

▲敢て自慢になるやうなものは一つもないが、名物と云つてよいやうな種類のものはある。

▲先づ社長永樂町人の原稿の字である。一枚の白紙にセイセイ五字位しか書かない上に、之も作稿苦心のためかも知れないが、其字たるや深く之を望めば繪の如く、近く之を熟視すれば字の如くまことに得體の知れない字で、稱して以て未來派の字といふことが出来る。それもいゝが困るのは印刷職工で町人一篇の文章を刷上げるまでには鳩首發議の評定數十回を經なければならぬのださうな。故に一名職工泣かせの字といふ。

▲記者も今日まで數百人の原稿の

(18)

静養中。其後任は前京取市場の仲買委員長として有名な井口陸造君が世を忍んで穿つた商況面を造つてゐる。丁場では何と云つても最古參の石口長太郎機械部長、松尾忠八植字部長が柱石として光つてゐる。石口君は輪轉機に左手指二本も噛まれて社業の爲め片輪になつたと云ふ我が社に無くて叶はぬ名物である。營業方面は多士濟々金持らしい、巨額で絶へず貧乏を賣物の永井忠藏販賣部長、松原勇記廣告部長の酒、池畑健二郎外交部長の女、江藤徳衛君の鼻、此三拍子も名物だが……オツと之は秘密でした。

石田正君とか貴田忠衛君とか種々名物の素破抜も澤山あるが悪口を並べて諸君から擲られても氣が利かないからマア此邊で御免蒙る(一三六、一七)。

字を拜見してゐるが斯くの如く奇妙な字は始めてであるが實は夫子御自身も他に類例なき事を嘆じ内心頗る孤獨に堪へないものやうであつた。

▲處が最近、何かに載つた坪内博士の原稿を見て快心の笑みを洩らし『私のに似てるが私のよりまだ汚い』と、一人で喜んでゐる。變な知己を發見したもんだ。

▲次には同じく社長に關する事だが苟も社長であり乍ら洋服を一著も所持しない。まさか町人といふ名前に義理を立てたわけでもあるまいし、それほど貧乏してゐるわけでもないが私は不思議な事だと思つてゐる。洋服星の濤さんが來ると、いつもむきなつて勸説是れ勢めて行くが、町人頑強で中々其手に乗らず以て今日に及んでゐる。



京日自慢話

京城日報社 西村満藏

自慢話ならいくらでもある。が然し今更朝鮮の代表的新聞であるとか、發行部数が半島第一位であるとか、等、等、等、と云つたやうな事は口にしたくない。それは自慢話の種にするべく餘りに平凡であるからだ。

と先づかう大きく出て置いて、さてイの一番にかぞへたいのは、勤續十五年に垂んとする社員が三人も居ることだ。即ち通信部長の秋山忠三郎君、校正主任の國弘金八君、經濟部記者の中村定次郎君等がそれである。少し下つて勤續十年となると居るわ、ほんまうに帶で掃く程居る。『勤續十年や十五年、それが何んの自慢ぞ』と鼻であしらふ人が居るかも知れぬが比較的歴史の新しい半島の新聞界にあつて、一つの社に十五年近くもジツと腰を据えて居るものが三人もあるなどは、殆んど奇蹟と云つてもいい位珍らしいことなのだ。

如上三君の中、最も異彩を放つて居るのは國弘君である。齡六十を超へ頭鬚際として電燈と光を争ふ社内では『逆モーション』又は『古道具屋』で通つて居る。蓋し『古道具屋』と云ふのはその人相、骨柄、風采等から来た綽名なのだ。辭林の中からでも拔出して来たやうに、どんな六ヶ敷い字でも知らぬことなし、と云ふのだから、本當の意味に於ける生字引だ。無鑑

これなら何處へ行つても、大きな聲で自慢が出来る。

國弘老の禿つぶりは頗る鮮かなものだ。嚙き立ての薬罐のやうに痛快に光つて居る。恐らく薬罐に著物をさせたたら、立派な國弘君が出来るだらう。

禿さ云へばまだこの外にも澤山居る。社長は例外として、編輯局長の角田廣司君なども確に自慢に値する方だ。抑も角田君の禿たるや俗に正面攻撃と云ふ奴で、僅に残つた頭髮を、右から左へ一本つゝ、叮嚀に並べたあたり、宛ら腰を透して月を眺めるの趣がある。懼りながらこんな振つた禿は外の社にはあるまい。エヘン

肥つた方では、營業局長の河谷静夫君、毎串編輯長の伊藤韓堂君、庶務の龜井君等がその尤なるものだ。いづれも體量十八貫を下らず將に動物園の河馬と兄弟分の盃を擧げんとして居る。三人とも揃ひも揃つた健康家だが、殊に伊藤君はお銚子を五六本も倒した上、三人前の飯をペロリと平げてしまふほど偉大な胃袋を持つて居る。又その拳固と來たら宛ら鉄の如きもので、洋食皿の二三枚位は、重ねて置いて、一撃の下に粉微塵にしてたふ。金槌のない時には拳固で以て釘を打つと云ふから怖しくなる。

身長に於ては恐らく廣告部長大島勝太郎君、工場長小川三之介君の

右に出づるものはあるまい。二人とも六尺以上の代物だ。天井裏のお掃除の時などは、どうぞ御遠慮なく……。

そんなものは自慢にならぬと云ふなら、今度は酒で行かう。先づ横綱は大島君、龜井君、經理部長の眞砂猛雄君、伊藤韓堂君、中村定次郎君と云つたところだ。皆一升や二升では酒屋の前を素通りした位にしか思はぬ豪傑ばかり、いかな丸山さんでも、これには兜を脱がれるだらう。中村君は酒ばかりでなく煙草に於ても亦横綱である四十にして未だ娶らず、散髪は先づ三月に一回、風呂は毎月缺がさめと云ふ變り者、何時もちむさい顔をして年から年中、朝から晩まで、のべつ暮なしにスバリ、やつて居るので『泉岳寺』と云ふ綽名がある。よく尻から煙が出ないことだ。

數へ立てればこの外にも自慢の種は、まだくドッサリあるが、餘り自慢をし過ぎて、高くもない鼻をヘシ折られても、少しも自慢にならぬから、もうこの邊で御免蒙らう。

辻さんの事

遠藤 憲吉

『建物ばかり立派だつて君、保険屋の支店長ぐらい權限の狭いものはありませんよ、まあ君よく記憶しておき給へ、第一』といふ風に保険屋の成立組織等を鮮やかに説明しながら、いつの間にかそれが東洋生命御自身の宣傳を極めて仄かに、又巧妙にやり始める。辻支店長は宣傳術の權化らしい。いつの間にかやら人を引入れる。



# 朝鮮米と私の半生

朝鮮精米社長 天日常次郎

抑も生は食ふに始まるとの定義よりして其食糧の豊富なる國は常に優越するのは千古變らぬ大事實であらふと思ひます。此見地より生の爲に拓地事業は國民として須らく努力せねばならぬと信じ、私は夙に北海道に於て開墾其他加工食糧品の製造に従事しましたが、國際關係は日清の干戈となり、其結果は朝鮮は支那の羈絆を脱し専ら我國の保護指導を仰ぐやうになりましたので豫ねて朝鮮は土味膏腴にして最も米作適地なるも粗放なる耕作は收穫の薄弱なるのみならず未墾地も相當存在するを承知し居るより我國策としても大陸に向ひ、發展するの緊切なるは多言を要せざる所なりと思ひ、直に渡鮮を企て現地を踏むに至りました。

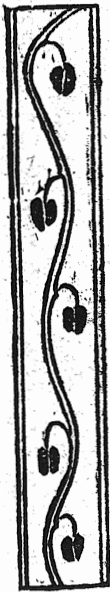
さて朝鮮に參つてからは何分にも産業方面に於ける諸施設の幼稚なるを直覺し、前途改善の餘地多きに快心を禁じ得ないので、二つの感想を喚起しました。第一は土地の經營、第二は産物の販路でありましたが、物の順序として凡ての事物が實行經驗の貴重なる箴言に鑑み先づ第二より著手することに決し、茲に精米工場を開始して爾來鮮内各方面の産米を手を觸れましたが品種品質不同にして中には想像の出來ぬものもありて價格も頗る低廉を免れないのでありまし

た。其後日露の戦役は日韓併合を招致し我國策の確立と共に産業方面に對する指導督勵特に生産の大宗たる米に最も重きを加へられ、此間に於ても朝鮮移住の激増と營農者の渡鮮により年々歳々更新に更新を加へ、從來の面目は一掃され尙ほ孜々として倦まざるの效果は異常の發達を來し、今日の盛況を目轉た今昔の感を深ふるのであります。今や朝鮮米は内地優良品と匹敵するに至り、母國人口増加に伴ふ食糧問題の解決上最大使命を帯びつゝあることは大正十二年末迄の内地移出米の散布が三府三十七縣に亘り朝鮮米の眞味が理解され需用が各方面より起り來れるに見ましても判かるのであります。之れに對する健全なる販路の樹立には一層の努力と多少の犠牲を拂はねばならぬ幾度の研究問題が階はつて居る事を覺悟せねばなりません。其れには朝鮮産業の經濟力に對する微弱にして生産者が收穫物を競ふて賣り放つため内地集散市場に於て朝鮮米は常に定期筋の所謂道具米に供せられ例年鮮米の壓迫なる評語を受け、其眞價の發掘を妨げらるゝみならず内地生産先より販路の障害なる怨言を流布せられ、其上此の定期道具米は永く庫底に蓄積さるゝより氣侯の變化にて自然變質米を生ずること往々ありて價格の損害ばかりでなく之を需用となる先は直に朝

鮮米は臭氣があり且つ惡味なりとの評を宣傳して朝鮮に於ける土下幾年の努力を滅却するの因をなすこと尠からず又一面に於ては内地定期取引市場は往時の鮮米觀念を脱せざるより朝鮮米の格下範圍擴大なれば彼等の常套手段として常に最低級米を標準として敵手を苦しむるより産地に對し價格の低廉なるものを物色するの弊がありますので、是れ迄屢々内地營業者の反省を促しまして多少諒解を得た處もあれど猶ほ格下げの存在するより過般來問題を起したる群山米の如き失態を演出し朝鮮の立場として寔に遺憾至極であります。

此等は當局の指導施設に待つ許りでなく生産先並に取扱商人一致協同して德義に訴へ改善の實効を擧げ鮮米の眞價を發揚して販路の擴張に努力貢獻せざるを得ないのであります。斯く觀じ來りますれば世の進歩に伴ふ化學の力と分業の發達は忽ち付す可らざるは固より我帝國の前途を想ひ、大陸發展の地歩たる朝鮮に於ける産業振興は重大の任務を意味するものがあると思ひます。其れは更に一步を進むれば無限の大陸を控へ居る事でありますから正義人道の虚飾を剥かし人種の偏見より侮辱を甘んぜねばならぬやうな國々を眼中に置かず一視同仁の偉大なる聖蹟を奉獻して朝鮮の産業を隆興せしめて母國に劣らざる新天地を實現し島國的の因襲たる慕郷歸居の蒙を覺醒して欣然朝鮮移住を促すの動機を作るは苟くも足一たび朝鮮を踏みたる者の責任たるを忘却してはならぬ處であると思ふのであります。更に進んで眸を放ちますれば同文同種の大衆は社會の文化

に浴せず人生の禍社を受けず只管  
未來の救を叫びつゝあるものゝ如  
く之等の對策も帝國の双肩に墜り  
居るを思ひますれば我々として先  
づ手近で現に接觸し居る朝鮮産業  
の大宗たる米に於て改善向上を計  
り幾多の懸案解決に渾心の努力を  
盡すことを夢寐の間も忽にしては  
ならぬのでありますから共存共榮  
の根本を基礎として邁進せねばな



### 本町漫筆

蜻蛉亭主人

◎前後左右に融通の利くトンプボの  
目には色々なものが映つる、京城  
の銀座本町通に國民黨の稱がある  
それは舊三丁目の一角唯今の三丁  
目の入口にある、鐵傘の下の一角  
にある。

◎此の中でも左側の方から調べて  
見ると、ちよぶや主人堀内氏の文  
筆に親んで居られる事や松翁屋主  
人中尾氏の油畫に熱心である事は  
既に雜筆に現はれて居るところで  
あるが、丸一主人の佛教信者であ  
ること。うさぎ足袋の朝寝坊。

◎それに反對の右側で朝起坊は例  
の三層樓主人の森啓さんであるそ  
うな。此人昔は森安といつて居た  
のであるが改名したとのこと商品  
も可なり好いものがあるけれ共値  
段も……。それから同氏は非常な  
骨董の愛好家で鑑定眼も可なりあ  
る、書畫の中では『○畫』を殊の  
外愛好して所藏の大部分はそれだ  
あると云ふ。

◎お隣りの増田三種さん今年の商  
議に當選されたが以前はよく落選

らぬ慮なれど此等の事業は如何に  
個人的に集るとも、効果の薄弱な  
るは三尺の兒童も能く之を理解し  
居る處であるを思ひますから、内  
地居住と鮮内居住とを問はず帝國  
に籍を置く以上は此の現勢を顧み  
られ前述の意義の諒解を仰ぎ協同  
の力によりて帝國使命の一端に貢  
獻したいと思ふのであります。

したもので前回の選挙の折に、人  
は當選祝をして運動員や後援者の  
勞を稿ぶが、増田さんそれが出来  
ない然しながら、失敗する時は、  
成功するよりもヨリ以上の努力を  
要するのである、後援して呉れた  
人々に對して申譯がないと云ふの  
で『皆さんの切角の御後援御盡力  
も不肖不徳の致す所云々』と云ふ  
理由の下に慰勞宴を張つた。つま

### 横山氏の事

杉野 廉 一

▲平鹽大同銀行の頭取は横山さん  
である。

▲横山さんは以前鮮銀に居つたこ  
ともあつて、銀行業務の實際家と  
しては、先づ朝鮮でも氏の右に出  
づる人はない。

▲氏は晩年の仕事として大同銀行  
の經營に、非常の愛着を有つて居  
るが、隨つて同行は地方銀行とし  
て、全鮮第一の堅實振りを見せて  
居る。

▲横山氏の將棋は、殖銀有實頭取

り落選祝をやつてのけて今回は見  
事當選したと云ふことである。

◎右側の増田中時計店の主人田中  
さんは、中央大學の法科出身で此  
前忠北の警察部長になつて行つた  
講習所教授であつた佐伯さん等と  
同窓で銀行會社や裁判所あたりに  
も可なりの同窓や親友を持つて居  
る、更らに柔道に講道館三段の腕  
前、従つて此の方面にも可なりの  
知己があるのは此の一角で一才異  
彩を放つて居る。

◎左側商店は概して青年の主人で  
あつて右側は田中さんを除いては  
殆んど老年の主人連ばかりである  
茲に於て、青年黨から提出された  
町内政治も比較的優勢である老年  
黨の爲めに一蹴されて終ふことが  
ある、それで時々業を煮やした、  
青年黨では、此の老年黨側を稱し  
て、國民黨と呼んで居るそうな、  
そして若し或場合に兩黨對峙し  
面倒にでもなりそうなる時に何時で  
も中間に乗出して、マア／＼の役  
目は、龜屋の主人進辰馬氏である  
そうな、進氏は何事によらず世話  
好きなので其名が高い。

の碁と共に、銀行界では異彩を放  
つものである。有賀さんは敬虔そ  
のものゝやうな人だが、碁局では  
途散もない荒武者だ、大に蠻氣を  
發揮する人だ。所が横山氏は、そ  
の將棋も亦た銀行經營と同一、精  
密にして堅確である。丁度昔の朝  
汐の角力のやうな堅實振りだ。現  
に二段といふ肩書を有つて居る。  
▲平鹽のやうな土地、あのむつが  
しい所で、大同銀行が綿々たる餘  
裕を有つてやつて居るのは、大に  
人意を強うする。畢竟頭取が誠意  
誠心銀行を熱愛するからである。

首 の 話

篠 田 治 策

七月號にも何か書けと、下村君がわざわざ役所までやつて來ての御催促、何か書けたらと思つて居る内に、二十日の日限になつたが、遂に書く暇がありませんので誠に申譯がありません、特に今回は御しを願います。

六月號の河谷さんの『東京から』の中に『東京といふ所、馬鹿に首の小さい奴共の住む所です』は面白く拜讀しました。河谷さんは廣い東京にて十六半のカラーを得るに困られたさうなが、小生は十七のカラーですから、毎に一層閉口して居ります。夫れだから此文章を讀んで大に同情に堪へなかつたです。

震災後の東京に十六半のカラーが無いとすれば、十七のカラーも無論得ることは困難である。これカラーは如何にして補充すべきかが大問題です。

夫れカラ小生の知れる範圍で一番大きなカラーを用ゆる人は、平塚の關口檢事長です。同氏のカラーは驚く勿れ十八です。何處を探してもこんな大きなカラーは無いカラ、常に別に造らしむるさうです。關口氏にはこんな逸話(?)もあります。同氏が先年宇都宮とかに在動した時に、帽子が餘り古びたので、曆屋に拂つて仕舞つた。日曜日かの晩方に帽子を新調すべく、帽子屋に出かけたが、八番とか九番とかいふ滅法界に大きな帽子は何處にも無い、市内全部の帽子屋を漁つたが遂に見當らない。大頭を撫でつゝ歸つて來ると、古物商の店前に大きな古帽を發見して、被つてみるに丁度自分の頭に合ふようである。古物でも無きに勝ると早速之を買求めて歸宅したが歸宅後能く調べて見ると、今朝曆屋に拂つた自分の古帽であつたので、何んだ馬鹿々々しいと大コボシだつたさうであります。

南 大 門

松 井 民 治 郎

明け方、汽車が南大門驛（今は京城驛）に著くと、朝霧や温突の煙りが低迷して、南山の翠色が有無の間に見へつ隠れつつ居る。乗つた人力車が動き出す途端に、南大門の反り屋根が、夢の上に建てられた様に見上げた刹那の感じと云ふものは、全く以て詩に恵まれた幸福を謝せずには通られぬ。

崇禮門の扁額は、筆意莊重を極めて何だか神々しい心持がするし、欄扉に描き出された巴紋の色彩や、建築が古色蒼然として古畫の中から飛び出して来た如くに思はれ、苔蒸すかの様に見ゆる青羅は、臺石一面に彌蔓して野趣其の儘である。

私が始めて京城に來た時、もしも驛頭第一に、此の詩的な空氣を浴びなかつたら、かうも度々京城に出入することを幾分か減殺せられたかも知れぬ。

明治四十年の某月、日韓協約成立の際に、韓國の兵權も廢せられた時、丁度私は京城に居合せて、其際の騒ぎを目撃した中に、兵士が此の崇禮門の樓上に陣地を構へて鐵砲を出して居た一幕があつた。私は其時はど殺風景な感じをしたことはなかつた。其れから間もなく、或る高官に話したことがある。之から若しあんなことがあるとしたら、崇禮門上に鐵砲をやるよりも私を番人としてあの門の上に住まはして下さい。私は何より崇禮門が好きですから。但し家内は勝手が悪いと小言を云ふだらうが、本當に私は崇禮門の上に住んで見たい。浦島太郎はこんな門を見て來て、龍宮の譚話を物語つたものでないかしら。出來ることなら、電車や電線や、そして交番を取つて貰つたら尙一層いよと思ふ。



京城昔ばなし

山口 太兵衛

眼を閉ぢて京城四十年間の變遷の跡を辿ると、隔世の感と云はうか殆ど言辭に盡し得ぬ千萬無量の感懐に囚はれる。茲には明治十八年から同廿年迄の京城に於ける邦人の生活状態を回顧してみたいと思ふが何分にも四十年前の夢の跡を甯ろの記憶を唯一の便りとして記すのであるから、或は記憶薄れがないとも限らず、錯誤もあるかも知れぬ。此點は異々々豫めお断りしておきたい。併し、本稿は屢々修正補足したり、友人等にも出會して色々當時のことを對談して、記憶を喚起するに努めるなど、出来るだけ意を用いたものであることは承知して頂きたい。

や、公使館の用を便するために來ることを許さへてゐた」と公使館の建築工事に従事する職人等に過ぎなかつたのである。

第一期の京城入京者——即ち明治十八年春から夏にかけて移住して來た人々——は、どんな人達で、どの邊に住んだか、と云ふと、始めは大底、元の第一銀行支店即ち今の漢城銀行支店の所にあつた合宿所——と云つても特に合宿所として建てられたものではなく、日本語に通じた或る鮮人の住居の一部を借りて、之にあてたものである。——に入つたもので、其處を根據として色々必要な交渉をして他に住居なり商店なりを求めたのだ。

第一期の京城入京者——即ち明治十八年春から夏にかけて移住して來た人々——は、どんな人達で、どの邊に住んだか、と云ふと、始めは大底、元の第一銀行支店即ち今の漢城銀行支店の所にあつた合宿所——と云つても特に合宿所として建てられたものではなく、日本語に通じた或る鮮人の住居の一部を借りて、之にあてたものである。——に入つたもので、其處を根據として色々必要な交渉をして他に住居なり商店なりを求めたのだ。

現時京城繁華の中心となつてゐる本町通り目貫の場所三城呉服店の邊も、四十年前は朝鮮人の家屋が點在してゐるに過ぎず、今の花月の所は空地、古城梅溪君宅の向ひになつてゐる地域は畑であつた。よく桑田碧海といふことを云ふが此の京城では、此輩へが餘りにも我等の眼前に間近く横はつてゐるのに、今更驚かれる次第である。然らば一體何時頃から一般邦人の雜居が京城に許されたかと云ふとそれは明治十八年のことで條約の結果に因つてゐる。それまでに京城に出入してゐたのは、纏に御田達(仁川に居住して時々守備隊

(私も其時はまだ血氣盛りの青年で、翌十九年徴兵検査に内地に行つたといふ始末である)。倭城臺の下、柳溪に入る所に、現に交番がある。その交番の向ひの所に舊領事館があつて、之を角として黄金町の方に通ずる道路——舊領事館通り——が即ち我等邦人が最も早く住んだ處なのである。

校の前、今料亭有明樓になつてゐる所に宮本と云ふ人が同じく雜貨屋を始め、故人となつた市川といふ人が今の松翠樓の所に住し、又交番と並んで今官舎になつてゐる所に松本といふ人が旅館をやつてゐた。旅館の嚆矢としては、釜山の料亭泉屋の女將若松なをいふ女が、今の本町青々園(此邊は當時空地だつた)の隣りの大きな朝鮮家屋を買つて、計劃したのが十八年の末頃で、それを現に大和町に住つてゐる洲上定助氏の嚴父の久兵衛といふ人が譲り受けて貿易商店を開いたのだが、之と前後して、和洋食料亭で旅館を兼ねた西洋亭といふのが出來た。場所は前の本願寺(本願寺は以前は壽町にあつた)の處であつた(主人は山城惠作といふ人)。最近故人になつた森勝君は其當時西大門外で湯屋をやつてゐたが幾許もなく火事で焼けた。舊銅觀通り即ち黄金町ではタツタ一軒大塚といふ人が雜貨店をやつてゐたが、之は支那の勢力全盛時代に鮮人等の壓迫で、やがて舊領事館通りの方即ち邦人の巢窟地帯へ引上げて來た。中村再造君が入京したのは、右の人達より少し後れて、十九年中のことだつた。場所は今の本町二丁目、富田の物産店のある處で、其の附近今の木島時計店になつてゐる處には慶田といふ人、又今古城梅溪君の住んでゐる處には柳武貞といふ人が居を下してゐた。慶田の筋向ひの處には、和田常市君の兄芦刈君が、仁川から根據を移して來た。私は十九年に前述の如く一旦内地に歸つて徴兵検査を受け合格したが抽籤の結果、入營せず、廿年春早々再度の入京をなし田中常次郎

1167

氏の先代から譲受けて、三田徳子

のものゝ外、醫者では古城梅溪君

も出來ない、並つて...



氏の先代から譲受けて、三田硝子店から三軒目の地點に住むことゝした。

◇ 何しろ日清戦役以前の袁世凱の勢力と云へば飛ぶ鳥も落すばかり、偶ま邦人に土地を賣る者があつてそれが發見されると、其金を没收した上に、賣つた鮮人は罪人として遠慮なく牢屋に入れるといふ始末、朝鮮當局では自ら屬國を以て甘んじてゐた位なんだから、どうにも仕方がなく、邦人の發展を阻碍したことは一通りではなかつたのである。

私は性來何事でも世話を焼くのが好きなので、屢々領事館に建言もし、殖民策に就て主張したのであつたが、外務當局の退嬰政策は之容れて呉れなかつた。

そんな風で邦人發展の區域は極めて狭い部分に局限され、前述の通り領事館通りや浦尾旅館の横の朴井洞(バグワンムツコリ)や、又本町は泥岬を主として、東は現に關繁太郎氏の持家のある所、西は今龜屋のある地點までに過ぎなかつたのである(俗に此區域一帯の日本人街を泥岬と稱した)。

◇ それが日清戦役後に及んで、邦人の勢力は主として本町を東西に伸びて、領事館の如きも、今の府廳の處に移轉し、郵便局前の廣場の邊など漸次日本人の住地となり、後更に人家取除きの上今の郵便局が出来たのである。

それまでは邦人家屋は泥岬以外は飛びくりに散在してゐたものが、卅七八年頃になつて殆ど府廳邊までは邦人家屋が揃比する事となつた。

當時の邦人を職業別にみると前述

のものゝ外、醫者では古城梅溪君之が十八年我等と同時代に入京した第一期の醫者で、氏は公使館付嘱託醫として來たのが、同廿年に現在の地に開業し以て今日に及んでゐるのである。當時鮮人の間には天然痘は暮るがまゝに放置されてゐたので今からは想像も出来ぬほどに猖獗を極めてゐた。そこで一般の希望を容れ、古城君をして種痘醫といふものを養成せしむることゝし、三ヶ月間の速成で無報酬で行つたものである。

洋服屋の始まりは明治廿年入京の木村といふ人、呉服屋の最初は私で、貿易業を止めて後、雜貨屋に轉業して一面に呉服屋を兼ね、後之を専門にしたのであつた。

尤も私は今日までに大抵の商賣はみんなやつたから一通のことは何でも知つてゐるわけだ。處が商賣と云つても、鮮人との取引は殆ど物々交換といふ有様だから、今時のお方などには殆ど想像

も出来ない位のものであつたのだ仕立屋の嚆矢は今浦尾旅館になつてゐる筋向ひの處で始めた中村ハツといふ人で、中村夫婦は又菓子屋(當時の事だから無論小き店である)の嚆矢でもあつた。少し後に菓子屋は三軒ばかり出来た。

◇ 次號からは逐次、或る部門毎について記したいと思ふ。

附言、京城に於ける邦人發展の跡を観ることは、意味のあることだと思ふが、誤りのないことを書き残さう爲めには、中々困難も伴ひ、又かゝる小誌面では充分に盡すことも出来ないから何れ聞を得たら當年の舊友(京城の和田常市君、仁川の田中君其他數名で)温泉にでも浸りつゝ、氣分を統一して、充分に語り合つて稿を練り修正補足して、小冊子にでも編成しておきたいとの希望を有つてゐる。

### 青葉の門

朝鮮銀行 七 梧

◆ 青葉の門のあるじを見たことがない

◆ 鉢の花にカーテン觸れようとする

◆ 草花咲く夜は灯したまゝで寝やう

◆ 塔多い町を短夜の水が流れる(舊作)

◆ 庭を蔽ふ雜草に夢殘る七月(舊作)

雨の日曜の記

朝鮮殖産銀行 野田 神郷

(三三)

暴風の様な音が聞える雨の音がする、朦朧たる夢心地が次第に薄らぐに伴って、雨の音が段々判然して来た、風も可成り強い様だ。

馬鹿な夢を見て居たと押し乍らいよ、今日は雨降りだと正氣になつた時、私の心中、悲喜交錯、實に何とも云へぬ複雑な心理状態であつた、一方に緩つくりと落付いた気分が出来たと同時に『多忙なのだ、時間がないんだ』と云ふ唯一の遁辭を失つた私は矢張り昨夜の苦惱を續けねばならなかつた。随分無沙汰をして居るので、是非こゝ云ふ日曜に訪問せねばならない先があるんだか、どうも出掛けられない、不動の金縛りとか云ふ工合だ、不得已溢々ながら原稿紙を取出して机に向つた。

今日は土曜日だからと云ふので、鮮銀の方々と一緒になつて、孝昌園を二回も廻つた。初めが五時過ぎたから、如何に此頃の日永と云へ、クラブハウスに戻つた時には早や薄暮が迫つて来た、それまで飯も喰はず少し許りの飲料で、空腹を忘れて汗みどろになつて居たんだ、自分乍ら餘りの熱心さに呆れる。何時まで續く事だろうと思ふと可笑しくもなる。明日は日曜だから、朝七時頃から出掛けようとか、少くとも六回は廻ろうとか、マツチをやるうとか、いろいろな約束をし乍ら七八人で山越しに岡崎町に出て、内へ戻つたのは九時頃だつた、小供等は待切れずに食事を済ませ風呂に這入つたとの事、子供を可愛がらないと何時も小言を云はれる私にも、食卓の淋しいのは静かでありとは思はれなかつた、横に置いてあつた來信を取り上げると封書が二通と葉書が一葉、封書は差出人を見た丈で開封せずに葉書を恨めし相に見詰めた、差出人は京城雜筆社、用向は簡單だが私には前からの経緯から考へて随分苦しい督促状なのだ明日の日曜を見込んで出したものに違いない。随分社同人も人が悪い。私も商賣柄督促の呼吸は相當に心得て居る積りだか、これはまた仲々に徹底して居る、確に急所を突かれた。

どうも深みがない様だ。横さまに山の背越ゆる夏の雨降降りの夏雨しきる鳶の窓益々陳腐になる、どうも句になりそうにない、いよゝ行詰つた時平塚からSさんがいらつしやいましたとの知らせにヤレ〜難有い宛すれば通ずだ。

併し詩的天分を持たない、藝術味に缺けた、教育の足りない私に何が書けるものか、之は無理を強ゆ

と云ふものだ、それに今も約束して来た通り、明日は朝から出掛けねばならないんだから……。そうだ、生憎時間がないんだから仕方がないぢやないか、ナニニ本さんにも下村さんにも今度逢つた時は、何とかそこは可然お断りをして置けば済む事だ、と苦しい乍ら一應は決心をつけては見たが何だか氣に掛つて居たものか、兎角その確書が目觸りになる、葉書を見ると四五日前の事が思い出される、社の方にあゝも云つた、こゝも約した、明日の龍山行は止めなしようか知らとの氣になつた、それに氣に掛る事があると、行つたつて當りやしないだろうとも考へた、でも明日は朝早くから隣のWやHやNが誘ひに來るに違いない。この前の日曜日も自分だけ行けなかつたのだから、明日はどうしても一緒に行かねば義理(?)が立たない、殊に鮮銀のMからも挑戦せられて居るから、後ろを見せる様な事は斷じて出來ない。と愈々最後の決心をつけてからは幾分頭も軽くなつて何時ともなく安らかに眠つた。

四番コースのテチーに立つて銅像の方向をねらつて打つた球が、シユーンと唸りを立て、紺碧の空に雜木林の新緑を掠めて、白線を曳いて延び飛んだ、稍少時の後『打テマース』と尻上りに叫ぶキャデ一の聲が遙か林間の彼方に聞える何時の間にか又『ザーン』と云ふ

涼 楊 隨 筆

鍾路角田商會 川 端 三 次 郎

空氣のこと

自分は毎日算盤を撥ひて居る商賣人で、科學など談ずる柄でない。併し之れも自分の趣味の一端、所謂下手の嗜好の類かも知れない。近來空氣に關する研究が次第に盛になつて來た、米國にては無線電話の流行頗る猛烈で、音樂や演劇などが盛に空中に放送せられ、國內一流の樂や劇が、家庭團樂の内に居ながらにして聴くことが出来る。又最近大統領の議院内の演説が遠く數百哩外の都市にて聴聞せられて居る。英國に於ても本年四月廿三日ヴェムブリーに於ける、大英帝國博覽會開會式に臨御の皇帝陛下の勅語が廣く空中に放送せられ無線電話機により、普く他の都市に迄聞へたり、又はカンタベリ僧正の祈禱の聲が聞えた時には途行く婦人が路上に思はず跪いたといふ奇聞さへある。昔はマゼランは地球を一周せん爲めには遠く喜望峰を回航したものが、今のマゼランは斯かる迂路を取らず飛行機にて空中を直行せんとして居る。無論前者は電氣との交渉が多いけれども、空氣を考慮せずには到底行はるゝことでは無い。従て空氣といふものに對しての研究が、益々大視せられて來た觀がある。左に最近の學說二三を擧げて見よう。

空氣の頂點

數ヶ月以前佛國の天文學者モロー氏は其研究の結果を發表して、

のである。

氣中の塵埃

米國東海岸に生息せる人が呼吸して居る、一吋立方の空氣中には五〇〇〇乃至四九〇〇〇箇の塵埃が混じて居るとは、米國測候所の計算した處である。倫敦に於て濃霧の時普通の人間が、廿四時間に呼吸する塵埃の數約五〇〇、〇〇〇〇〇〇、〇〇〇個に達する。若し之れを一線に連結せば、優に二五〇哩の長糸を作り得べしとは、空氣調査委員會が最近(一九二二―二三年度)の報告にて發表した處である。尙該報告に依ればウェストミンスター區會議事堂に備付けたる自動空氣濾過器にての實驗では、冬期六ヶ月間の空中不純物の量は、夏期六ヶ月間の夫れに倍し又濃霧の日に在りては冬期の半晴天といふ可き日に比して約二倍の不純物を空氣中に混ぜりといふことである。

斯の如く空氣には常に多くの塵埃が混在して居る、併し塵埃無くしては日光を反射す可き物質を失ひ日の出、日の入の壯觀も失せ去り山腹に棚引く霞きては空中の雲迄も大部分は無くなるであらう。

◆介石氏の事

小 西 練 藏

本號は惜しむべき名篇を、時事に觸れたが爲に掲載見合せにした。筆者は岡村介石氏、例の兒玉存象が時局を蓋した卦の判斷の仕方が就て介石氏が斯術に於ける秘中の秘を公開して駁論を試みたもので氏としても最も會心の稿であつが當局の御注意により没とした、小坂の隠士に謹んで陳謝する。



# 株主にもいろいろ

## 合同銀行と京取の比較

京城日報社 伊藤 大輔

四月このかた、進むやうな進まないやうな何だか薄ボシヤリした、實商兩銀行の合同問題も當事者の骨折りと株主の諒解で漸く實現とまで漕ぎ付けたのは、朝鮮財界のため竟に結構なことと謂はねばならぬ。

元來兩銀行の歴史や營業狀態その外種々の方面から見ても、相當の迂餘曲折は無理からぬことで、尙ほ多少の遷延は免れまいと、實は沈黙の督促の中にも聊か危ぶんで居たが、事實は豫想に反して急轉直下的に合同可決となつた、全く期待を裏切つた。

然しそれは決して悪い意味でなく良い意味に於ける裏切りであつて此の結果が雖ては朝鮮財界に一つの福音を齎らすかと思へば、斯くも早く實現されたことを衷心から悦ばずには居られぬが、之れを悦ぶに先立つて今一つ感謝せねばならぬ一事がある。

それは兩銀行當事者の努力と株主諸君の公的觀念の發露である、一體斯う云つた場合には、其の何れもが自分の權利擁護や、利己主義に流れるのが一般の通弊であるのに、兩銀は當初から産婆役の鮮銀

に白紙一任と投げ出して掛つた、(尤も此間簡銀側で配當準備積立分配を云爲したが、それは鮮人株主に對する融和策だから己むを得ない)。

之れ明かに朝鮮財界の將來、商業金融界の革新と云ふことに眼覺め自己と云ふものを齎つて總てを公の一字に重きを置いた結果に外ならないのであつて、二十一日商銀大株主會の席上、其株主が、『他の營利會社なら兎も角、苟くも世界の公的機關と見做されて居る銀行の合同に際し、獨り自行の主張のみを言張ることは、公的觀念からして或程度まで忍ばねばなるまい』と、何んと其間の消息を明かに物語つて居るではないか。

之れに反して京取の現状はドウであらうか、拘株處分は重役に一任すると任して置きながら、昨今では時機を失したからとて大童になつて、眞正面から問責呼はりを始め果てはタツタ五千圓の重役報酬さへ卷揚けた上、辭表を出さして一昨日來いと云はぬ計りにゴツキ出さうとして居る。

然かもそれが、或る野心家連の思惑的策動からだると云ふから尙更ら心細い、之れじやハイ左様ならと

辭表を出す重役も無責任なら、任して置いて今更ら責任呼はりする株主も株主で、全で空を仰いで唾を吐くやうなものだ、しかも各々眞甲には京取改善てふ旗を掲げてゐるから面白い。

今兩者の業質から對照して見ると銀行業が世界金融上の公的機關なら、京取も亦た鮮内有價證券の賣買融通の圓滑を圖る、公定市場ではあるまいか、それなのに前者は協力一致、利己主義を離れて只だ之れ公の一字の外、餘念かないのに比べ、後者は改善を標榜しながら、暗に自己の慾望を満たさうとして居る。

それと之れとは非常の差だが、サテよく考へて見ると其差は幾らもない、それは先づ後者から『利己』を減いて見ると、イクオール改善で、改善は即ち公ではあるまいか、京取株主諸君、合銀株主の襟度と思ひ比べて、……(吳聯十進)『善口』……の加減法を研究しちやドゥだ。

### ◆伊藤氏の事

田川 慶 雄

京日の伊藤大輔君といへば、少しも新聞記者といふ感じのしない瀟灑な好男子だがこの『株主にもいろいろ』の文章で容易に首肯されるやうに人物も腕も確りしたもんで、京日安東支局長から一躍京日本社經濟部長の要職に就いた人だけある。何ういふ學歴を履んだ人か、何ういふ記者の徑路を踏んだ人か知らぬが、蓋し京城の有する新時代の記者の一人である。

に洗れるのが一般の通弊であるの  
感策動からだと言ふから尙更ら  
心細い、之れじやハイ左様ならと

する新時代の記者の一人である。



## 流行と小生

朝鮮警察新聞社 田村直一

流行は色々な喜劇悲劇活劇を生む  
唯これだけでは判らないが。  
現代の世の中に於ける物事は總て  
流行ならざるものがない。  
凡ゆる方面に流行と云ふ言葉が用  
ひられて居る。

殊に婦人の髪形衣裳などと来て  
は、まるで七面鳥か猫の目の模た  
流行を逐ふのか流行に追はれるの  
か判断がつかない位である。  
そこで多くの人々は此流行を逐ふ  
とか追はれるのだと云ふ。

自分を本位としての問題ではなく  
て、恰も流行の捉はれ人となつて  
居る感じがする。

此處に於て色々な喜劇活劇が繰り  
返されて来る、誠に遺憾だと思ふ  
此のセチ辛い世の中で、いつかり  
饒舌つても金子があると云ふやう  
な時代に、金子にあかして流行を  
逐ふとか追はれるとか言ふ事は、  
到底我々貧乏人の出来る醫當では  
ないが。

流行に捉はれて苦勞をしたり焦つ  
て見る事は自由勝手だ。  
然しながら此の捉はれ方にも程度  
があつて、及ばずがらも人の眞似  
だけはして行ける人もある。が何  
れにしても詰らないものだと思ふ  
私は此の流行と云ふ事(服装)に  
就て私一人の信念を持つて居る。  
それは日々の流行と言ふよりも聊  
か時代遅れでも舊式でも體裁でも  
チツトも癖はぬ。

自分によく似合ふと言ふ事を以て  
足れりとして居る。

近頃市内でよく見かけるのである  
が御婦人方の髪に就いても確かに  
そうだとソクソク感じた事がある  
それは、例の最新流行耳隠しと云  
ふ髪に就てである。

幾ら流行だからと言つて何も人様  
のお附合ひ的にはしなくてもよき  
そうだが、此耳隠しと言ふ髪は、  
誰れにでもよくうつるものでない  
一寸見ても顔形が立派に整つて  
居る人でないと、どうもよく似合  
はない。顔の形も餘り圓くても長  
くても立派でない。

あまり圓ひになると何の事はな  
い南爪に牛の糞でも垂れかけた様  
な格構に見へるし。  
長いになると、卵子に頭巾と云

### ◆ 山口翁の事

小野健吉

▲山口太兵衛翁は京城の實だ、何  
しろ日清戦役以前の京城を知つて  
るものは外にはあるまい▲それに  
翁は呉服屋でゴザレ雜貨屋でゴザ  
レ習易でゴザレ今日までに手がけ  
ない商賣はないと云ふんだから、  
銀行や會社の調停役なんぞにはモ  
ッテ来いだ▲實銀商銀のゴタク  
も翁の出馬に依て解決したとは何  
しろ結構だ▲翁や老いて益々壯入  
で昨年あたりまでは酒一升位やら  
なければ飲んだ氣がしなかつたさ

ふ態である。

それから今一つは一寸した掛襟の  
色合の如きも無論人々によつて好  
みはあろうが。  
あかい顔をした人が桃色や紅、赤  
などの勝つた様は餘り見つともよ  
くない、どうかすると辨慶の火車  
見舞と云ふ俗諺を思はせる。

其反對に顔色の青い人が水色とか  
青の濃厚なのを用ひても、引立た  
ない妙にさびしい顔になつて終ふ  
何れにしても色の白いは比較的  
無難のやうであるが、それとても  
人工的にあまり白いき云ふ事にな  
れば亦一問題起る。

要は自分を土臺としての配合と程  
度も必要だが(人の事ではない)  
から『自分』によく似合ふうつり  
の好いものが一番好い。  
假令天保時代のものでも誠に奥ゆ  
かしいものである。

こは強ち御婦人方の悪口ではな  
い男子でも同じことだ。  
あの長髪に龜甲縁の眼鏡なそも寧  
ろ丁髷の方がよく似合ひはせぬか  
と思ふのである。

うだが、昨年禁酒してから殆ど一  
年に及ぶといふ▲今の翁は全く隠  
退の身であるが實業界の大久保彦  
左を氣取るあたり、東京の濹澤翁  
と位置境遇手腕等頗るよく似てゐ  
る▲そう云へばあの赤味がかつた  
顔の色まで瓜二つだと云ふ者もあ  
る▲流石絶倫の翁も此一二年非常  
に記憶力が減退したさうだ▲ど  
か翁の健康の異状のない内に、京  
城邦人發達史を完成させたいもの  
だ▲翁の女婿に京電庶務課長山本  
利雄氏がある敏腕の聞へが高いか  
ら此點翁も氣變なもんだ。



### 篠田博士に望む

京城日日新聞社 別府 八百吉

国際法の大家篠田博士の博學には何人も畏敬してゐる、殊にその朝鮮古代の考證は平明で易々と書かれ興趣の盡きぬものがある、私は博士の發表せらるゝものはその平壤時代からの分を最も愛讀してゐる一人だが、本誌前號所載新羅初期に於ける瓠公の考證は實に面白かつた、尤も多少牽強されて朝鮮古代の日鮮關係を結付けられたのではないかと思はるゝ節もある、然しその大きい意味の史斷は史學の専門家ならぬ博士の如き學者によつて初めて出来るものかも知れぬ

、く畑の中を歩いたものだつた道も何もそこにはついてゐなかつたこれは一例に過ぎぬが、月城の氷室のあとにせよ天文臺のあとにせよその他トコに廻つても類證しかけてゐる、唯残つてゐるものの中十分手入れの出来てゐるのは古墳のみのやうであつた。

それは兎に角去年の秋に私は友人數名と共に慶州を訪ふて、新羅の古都を一巡し、朝鮮古代文明の如何に燦然たるものありしかを登しい頭に感じたのであつたが、それと同時に朝鮮古代文明の遺跡の保存の如何に等閑視されてゐるかに不満の思ひを致し、その荒廢に心を傷めたのであつた。

慶州今日の荒廢は新羅から高麗、高麗から李朝と半島の主權者の變遷を來した結果、政治的の理由を含んでゐるであらう、然し今日としてはそんな事を問ふ必要は全くない、朝鮮民族が一千年以前に如何に傑出してゐたか、いかなる文明を有してゐたかは、その縮圖たる慶州の保存によつて朝鮮人は之れを大に中外に誇り得るであらう此の意味に於て朝鮮人の先覺者諸君が慶州古蹟の宣傳並にその保存につき殆んど見るべき事をしてゐられぬのは、私の一の不審としてゐる所である。

篠田博士の瓠公の考證に出てゐる慶州唯一の形勝の高臺月城を下りると、すぐ間近に皇寺の遺跡がある、現存してゐるのは當時の壯大な神樂を偲はする礎石のみであるけれど、その新羅朝に因縁の深い皇寺の本殿の跡は豆畑の中となつてゐて私等はそれを視る爲に豆のさやに下脚部をさらせつつガサ

慶州と李朝とは直接に關係はあるまい、然し朝鮮民族の主體たる李王家としては大きい意味に於て新羅文化を誇られ、此の民族に洗れてゐる智識の偉大を示し、過古既に然り將來も亦といふ意味からその前途の大に待つべきものある事を明らかにされる事も、決して徒爾であるまいと私は考へてゐる。李王職の歳費百五十萬圓、その御

所有にかかる財産收入を合せても王家の臺所は決して樂でないといふ、そこで色々な内部の整理も行はれてゐるやうだ、況んや古蹟保存の如きは必要あれば國家の手でやるべきものとの見解が至當でその向き／＼からは總督府に慶州の遺跡保持につき要望もされ、前年來總督や政務總監の慶州視察あり、現に慶州近郊の佛國寺や石燈庵には國費によつて舊蹟保存の手を盡されてゐる、然しかうした方面の不急な費用より、まだ／＼總督府としてはなすべき事業が山程あり、どうもその手は十分に慶州邑内には及ばぬやうである。

敢て私などが李王職に要望するまでもなく、篠田博士の如き立派な次官あり、又今村軀君の如き博識多才な庶務課長を有せる李王職としては、相當考慮してゐられるであらうが、その不十分な歳計の内から李王職……朝鮮民族の盟主たる李王家の事業として古代朝鮮民族の誇りたる慶州遺跡の保存に相當額——保存會に對する寄附といふ位でなく——を支出される事になつたらどんなものだらう、これは必らずしも私一人の望みのみであるまい。

篠田博士の御一考を求めます。

### 川上氏の事

吉田 莊 一

『ビール』の季節に入つたら忙しうと見へてサツパリお書きになりませんな』と麥酒會社の川上さんに恨みを言ふと『次號にはビールの歴史を書くよ麥酒には神話があるんだぜ』これはあの人の筆なら屹度面白からう。

るべからずだ。



# 刑事室のぞ記

京城日報社 伊集院兼雄

るべからず』だ。

△月△日(同) 犯人が判任官の妻だと言ふので警察では特に秘密にして話さない、何とかしてきかざつてやらうと夕食後出かけ、刑事室をのぞく。雨が降つて来た『どうです、例の件は、ものになりましたか、大體は知つてゐるんだが』敗け惜みでも此の場合さう言はないでは居られぬ。『あ、あれはね、君書いちゃいかんよ、本當に書いたら不可よ』新米の○○刑事があはて出した。その言ひ方が氣に喰はぬ。『續だ』と思つた時にはもう口から飛び出して居た。『どうして、書いちゃいけないんだ。書かうと書くまいとこつちの勝手だ。もし言ひ方があらうぢやないか、そりや君等の厄介になつてゐるんだから頼まるればきよもせうが、出やうによ、ちや僕も考へがある』思ふことをすつかり吐き出してやつた。新米刑事驚いて眼をばちくりする。『そつ言ふ譯ぢやないんだが、まあたのむ』

△月△日(或警察署) 熱いのにドアをたても何か密々とやつて居る『何かあるんだな』足音を忍ばして窓に近寄る。少しづつにぢりよつて、ひよつこり首を出す。ドアの並びに商人體の若い男が固くなつてかしくまつて居る。その側に二十二、三の小綺麗な女が居る

△月△日(同) 例に依り上りこんで敬意を表する。○○刑事と○○刑事が居た。其處に絆纏を着た五十位の男が細つきで隅つこに小さくなつて居る。『君の衣物を盗つたのは此奴なんだよ』捕まへた○○刑事は得意らしく男を睨んだ。『おうさうですか夫れは』

○刑事等はそれに向ひ合ひに三人横になつたり机によりかゝつて膝たたり、胡座かいたりして居る。女は伏目になつて男の膝のあたりに眼を落とす。刹那『見ぢやいかん』と○○刑事が口を尖ちして怒鳴つたのであはて、首をひつこめる。

『いや、僕も盗られた當座は著かへもないと言ふ譯でね、大體がそれだけしか持つてないんだから……しかし君悪いことはよしたまへよ、すくばれつちまふんだからね』親父みたいな男をつかまへて人なみに訓へたことが吾れながらおかしくなつた。

『ハテナ』『しめたつ』思はず咽喉をついてこんな言が飛び出す。氣つかれないやうに注意しながら入口を窺ふ。ドアを締切つて居るので先づ大丈夫、と息を殺して盗みきく。と突如ドアががたんと開いた。あはて、横の隅つこに身をかくす。それなりドアは開けつばなしだ。自分等がぬすみぎとしてるのに感づいたんだ。左には窓がある。右手は入口だ。逃げやうにも道がない。刑事に見とがめられるのもいま／＼しい。思ひきつて刑事室の前の板扉に攀ぢる。そして△△の構内に飛び降りてホット一息。

『いや、僕も盗られた當座は著かへもないと言ふ譯でね、大體がそれだけしか持つてないんだから……しかし君悪いことはよしたまへよ、すくばれつちまふんだからね』親父みたいな男をつかまへて人なみに訓へたことが吾れながらおかしくなつた。男は『へい』と頭を下げて鼻をすゝる。見て居るのも可憐だ。あんまりいゝ氣持ちもしない。『さうもお世話さんでした』と特に丁寧に言つて品物を貰つて歸る『新聞記者だから早く判つたやうなもの、普通人だつたら判りつこはあるまい』と思つて一寸誇りかしい氣になる。『泥棒よろしく新聞記者の家に入

『さう言はれると氣の毒だ。』『ちや今日は保留することに』と結んで筆を出すが自分はその内容を何にも知らないのだから驚く。どうかして突きとめてやらうと三十分後雨音に足をのばして窓の外から室をのぞきこむ。と三十位の女が三人の刑事に圍まれて調べられて居る。その女の顔を見届けた瞬間知るまいと思つたその女がおびえて懐えてる鋭い眼でぎろつと自分を見た。その眼の鋭さと言つたらない。自分はずく顔をひつこめたが氣が妙に變になつた。そして女のうらめしげな凄いの眼が頭にこびりついて忘れられなかつた。



# 平家一門

京城新聞社長

青柳南冥

人生の榮華を極むること平家の如く、又人生の慘鼻を極むること平家の如きは、日本史上の異彩也。九天の上に高嘯せる者、忽ちにして九地の下に墜落す、悲壯慘鼻、人生の表裏翻覆、禍福の久しく安宅す可からざるや此くの如し。平氏は桓武天皇より出で、源氏は清和の後胤也、源平二氏武勇を發揮せしは、天慶の亂にあり、乃ち平貞盛、源經基は、謀叛人平將門を討つて功有り、共に皇室の柱石たり。

後ち平氏に逆臣有れば、源氏をして之を討たしめ、源氏に逆臣有れば、平氏をして之を討たしむ、源平二氏の世讎此に於てか起る、蓋し廟堂の一大失策也。源平二氏各々皇帝に盡し、各々武士を養ふて、遂に源平二大門閥は海内を席捲せり、武門武士の稱、茲に於てか顯揚す。保元平治の亂を経て、源氏は黨領義朝を失ひ、平氏は清盛の威勢と共に開大せり、源氏殆んど亡びて、世は平氏の天下と爲り、平氏に非ずんば人に非ずと爲せり。清盛福原の風光を愛して、別業を興し、終に都を遷すに至る、驕慢極まれり、之れ實に平家の全盛にして、源氏再興の兆也。頼朝兵を擧ぐるに及び、諸國の源氏響應す、其勢ひ風雨の如し、驕る平家は遂に都を落ちて須磨に逐

はれ、屋島に敗れ、一門の將士宗盛父子を除いて、遂に壇の浦に沈めり。朝士之を喜悅し、史氏之を快とす思ふに興亡盛衰は、世上の常態と雖、平家一門二十年の榮耀、一朝にして亡滅死灰の如く、復た芽さすなくして終りしぞ是非もなき。

## 初會馴染の挨拶

大阪朝日新聞  
京城支局長

井上 收

人間の飯の種にもいろいろあるがスコップやハンマーを持つ稼業の荒行は、どう苦面しても、私の適ふ業ではない。別に親譲りの渡世ではないが、兎に角にも、自ら飯の種を稼ぐ業としては、耻しい話だが、筆で働くより外に能はない筋肉労働者側から觀れば、勞せずして指の尖で、好い加減なゴタゴタを列へ、實質價值以上の利得にありついでるやうな、ボロい稼業に見ゆるかも知れないが、どう仕つて、飯の種となると、他所様から羨まれるほどの、樂々みな稼業じやない。藝妓や女優達か、孔雀の翼を輝かし、蟬の羽根のやうに振舞ひながら、そのインナーライフの物凄火の車に、血眼の苦闘を重ねると、選ぶ所はない。

然れども茲に平家一門に、見遁す可からざる美事あり、それは興亡共に一門の團結也、二心の將無く、二股の武士無く、山櫻深く散つて壇の浦の月千古に煌々たり、此故に雖卒死を得ざる者、源氏の祿を食まずして、肥後の山中に五家の莊を成せり、實に亡國の譽れ也。源氏に至りては然らず、頼朝は戰功有る二弟を亡ぼし、功臣を殺し其子頼家は時政、義時に殺され、實朝は頼家の子公曉に刺され、父子三代の幕府は十年にして、瓦礫の如くに粉碎せられたり。余は頼朝の功業を誦はずして、平家一門に同情し、特に其最後の美しきを美傳す。

鳥渡筆尖か、ペン軸を蚯蚓の寢返りを打つ位に、動かせば、十枚や二十枚の原稿が、坐ろに出来る、と惟はると、其だ虫の納りが悪い。私達の大先輩、漱石夏目先生などは、遂々この筆の尖の苦しみから、この世を短く去られた。  
永樂町人、松本武正といふ人は、随分筆達者な人らしい、その文名も夙に耳にしてゐる。曾て人生雜記といふ著作の寄贈に與つたことがある、が幸か不幸か、邂逅ふ因縁のないものか、まだ一度も拜顔の榮に浴さない。所が今度京城雜筆がとり持つ縁で、何か書かねばならぬ破目となる。飯を食ふ業が、書を渡世とする以上、いらつしやいオーライ、と輕い調子の出會頭で、快く引受け

て然る可きであるが、本業の延長になると、どうもは問答が押さず、

でのみ、鼻をつけるも、奥歯に物

心理、ニーマーやウエットを盛り



て然る可きであるが、本業の延長  
となると、さうは問屋が御さない  
のみならず、心にもない安請合に  
讀者を煩すやうな、無責任な筆の  
運動を、白日の下に曝したくもな  
い。殊に少しもその風格に馴染を  
持たない人に、よし文章の上を通  
じて、よびかけの形式をとるの  
は至難の業である。その場のお茶  
を濁し、ホンの責任連れで、コ免  
を蒙るならば兎も角、その出来  
ない以上、筆尖で誤魔化す、塵文  
章の醜事でも甚だ納り悪い。

然し約束事を、反古にするのも心  
もとない。何か京城雑筆か、永樂  
町人かの上に、新しい馴染の縁し  
を發見したい念願から、初めて寄  
贈に與つた京城雑筆六月號を通讀  
した。

この内編輯後記と寄稿家への註文  
の筋を見ると、だいぶ人を買つた  
高飛車式の言句が多い。本誌を助  
げる氣なら原稿を書け、とか誰の  
原稿が早い、誰の約定は間違はな  
い、誰の文章は面白い、この人の  
文は拙い(とは言つてない)など  
だいぶ寄稿家を買つた御挨拶が妙  
くない、それは勿論、悪意でもあ  
るまいが、言はずと知れたし威文  
句——Threatening language  
の響ひが十分にうかゞはれる。原  
稿を書く者の立場から厭へると、  
不愉快な氣持になる。

斯ふ思ふ所を、書き立てて見るこ  
この原稿を書くのが、不足でたま  
らない、苦情を押しならべるやう  
にも、また腹癢せを吐くかにも聞  
ゆるか知れない、がそれも觀る人  
の心々で、ごちらにとられても書  
いた以上苦情もない。としてさて  
京城雑筆の新しい馴染を苦情の種

でのみ、鼻をつけるも、奥歯に物  
のはさまつた、心もとなさを感ず  
るので、この雑筆といふ詞さ、近  
頃の文藝愛好家の氣分といつた風  
な馴染を一言させて貰ふ。

近頃書籍店できくと、茶話、隨筆  
漫談風な體裁が、よく賣れるとい  
ふ、最もなことださおもふ。京城  
雑筆は、この意味から至極時流を  
心得た物だ、——などと徐々甘口  
のお世辭を、編輯者に陳する——  
など、半疊を容れては不可い、原  
稿の紙代位賣る量見だらう、など  
と素見しちやいけない。私の屋主  
は、私が一打以上の家族を養ふに  
は、事缺かめ扶持を、月の廿日頃  
には間違ひなく送つてくれる。嬉  
しいことは、さういふさもしい心  
持にはなりたくもなれない。など  
またしても、些か自家廣告に類す  
るが、この茶話、雑筆の類の世に  
迎えられる、といふ現代人の生澤



◆ 雑筆社雑筆

松井 讓治

▲ 鮮展日本畫首席入選三戸萬象君  
の朝寢は堂に入つたもので、十一  
時頃になつて來客でもあつて夫人  
から揺り起されるまでは決して起  
きないさうだ。氏は藝術家肌とい  
ふか極めて名利に淡い。選に洩れ  
て悲觀してゐる友人でもあると『  
おかしいですね、鮮展は決して最  
高の或るバロメーターではないに  
——』といふ風である『畫家は自  
分の意見は繪畫の上で發表しな  
すればいい』とも言つてゐる。

▲ 有隣生命の山路支店長、俳句に

心理、ユリマーやウェットを盛り  
澤山に要求するといふ心持、その  
心理に喰入つた、永樂町人といふ  
人のプランは心得たものだと思ふ  
近頃はよほど眞摯な文章でも著作  
物でも、斯うした雑文的傾向が  
ありくと見られる、官廳の殿し  
い訓示やお達しさえも言文一致の  
でありますになつたやうなもので  
單なる戯作でなく、中心に科學や  
學理の脱線のない限り、楽しく讀  
ませ、勞を強ひずに意得せしむる  
形式は、今後世智辛さのいや増す  
浮世に、大事な役目をなすもので  
ある。

この意味に於て、永樂町人とい  
ふ人は儲かに Miscellaneous  
writer であると私は思ふ、ま  
だ一度も顔を突き合せたこととな  
い人に、呼びかける私の、言はと  
初會馴染の挨拶は、この邊で御免  
を蒙り、またの逢顔に、必々言は  
せて貰ふ事にする。(六、一五夜)

精進すること三十何年、其の造詣  
の程は本誌前々號に寄稿せられた  
『俳諧私見』に表はれた通りだが  
氏が斯道に對する絶對的尊敬と、  
熱愛と、その門弟の多いこと、は  
全半島中比肩する者がないだらう  
との噂をそのまゝ。

▲ 熊平金庫店の支配人横山氏が某  
誌に寄せた『金庫の話』は、ま  
ことに得がたい讀み物だとして、永  
樂町人睡涎に及ぶこと一通りなら  
ず即ち社員參上、執筆をせむるこ  
と無慮數回であるが、氏は恐ろし  
く謙遜家で、『我々が執筆しては  
御諾の光輝を損する』と逃げる。



# 京城新聞界の變遷

## 言論股賑時代の四新聞

京城日報通信部長  
兼調査部長

秋山忠三郎

余は前號に於て、明治四十四年の秋、京城日報を除き、大韓日報、朝鮮日々新聞、龍山日の出、東洋日報等が、相前後して當局の買収に應じ、廢刊せしに拘らず、單り京城新報のみ、頑然として買収に應せず、却つて他の新聞の滅亡せるを奇貨とし、大に陣容を新たに

新聞の移轉を許可し、更に其の後二三朝鮮文新聞の發刊をも許可したのである。

して發展雄躍せんとするや、偶々明治四十五年二月、甚大なる筆禍を買ひ、新聞紙としては容易に有り得べからざる發行禁止の厄に遭ひ、遂に倒壞の己むなきに至り、依つて茲に京城には、京城日報一新聞のみの存在となり、昨の股賑なる京城の言論界は、俄然秋風蕭殺の觀を呈するに至りしといふ頃を以て筆を擱いたのであつた、其の後大正九年迄九ヶ年間、京城の新聞界は、京城日報の一人舞臺であつたのである、之れより先き大正八年九月、齋藤實男、朝鮮總督の印綬を帯びて任に朝鮮に渡り、

爰に於てか京城には三新聞(邦文)の鼎立を見、言論界稍や活氣を呈するに至つたのであるが、昔日の旺盛股賑時代に比すれば、轉た寂寥の感を催うさざるを得ぬものがある、併し之れは時代の變遷、世運の推移の然らしむるところで、決して今日京城の言論界が、昔日の夫れに比し、遜色ありといふのではない、否な却つて勝れるものあるを思はしむるものがある、即ち昔日の各新聞の論調記事は、京城日報を除くの外、往々自由を脱して放縱不羈に流れ、常規を逸して奇矯激越に陥り、取り分け統監府政治を抽象的に爬羅剔抉せんとすることのみを以て能事とせる新聞にありては、事毎に反對せんが爲めの反對的態度を執り、非難せんが爲めの非難的行動に出で、從つて外觀如何にも霸氣、活氣、霧氣に富み、旺盛と股賑とを極めて居るかの如く見ゆるのであつたが

從來の武斷政治を排して、文化政治、民衆政治を標榜し、百般の施政悉く面目を一新せんとすると共に大に言論の自由を尊重し、且つ之れに依りて時代の趨勢と民心の歸向とを察すべく、翌大正九年、京城日々新聞の發行を許可し、又同年從來仁川に於て發行せし朝鮮

内實は枯らんか主義の營業政策上徒らに世俗に迎合するの風があり其の昔日本新聞、東京日々、報知新聞あたりが、極大の筆を揮つて言論の雄を争つた偉觀壯觀に比す

れば、固より日を同うして談ずべきものではないのである、尤も此等新聞の矯激なる言論に對し當時の伊藤公は、流石曠世の大政治家丈あり、他山の石として之れを迎へたので、中には公の雅量に感服し、大に筆を慎しむやうになつた新聞もあつたのである、併し當時朝鮮は新政施行上、初期時代であつたので、新聞制令の如きも完全せず、斯くの如き現象を呈したのであらう。

然らば今日、京城の言論界は何うであるかといふに、昔日の如く放縱不羈の態なく、奇矯激越の姿なく而も其の社に依つて立場は異なるが、何れも中正著實、眞摯安詳(尤も朝鮮文の新聞はいざ知らず)眞に朝鮮統治の向上と開發に資し、二十萬民衆の福祉を念とし、一意新聞紙としての天職使命を果たさんことに努めて居るのである時代の變遷、世運の推移は、空理空論を避けて實際に就かば構義放論を排して事實に立脚せしむるやうになつたのである。

余は往年、京城言論界の所謂股賑を極めし當時、即ち明治四十二年或る雜誌に京仁六新聞の批評を寄稿したことがある、今之れを筐底に探り、仁川の新聞を省き、京城の四新聞、即ち京城日報、大韓日報、朝鮮日々、京城新報の批評を左に摘録し、以て聊か當時の言論界を偲び、同時に讀者諸君の一察に供したいと思ふのである、但し何の新聞も總花的に賞めせしむる謙ひがないではないが這是同業の交誼上已むを得ざるに出でたのである。

飛び出すといふにありと、毒罵冷

### 京城日報

流石に内帑の不足なき丈ありて、手も揃ひ人も多く、紙面何うやらふつくり恰好良く見ゆ、編輯實に馴れたもの、見出しの工合、順序の配合等は確に老練者流の手腕といふべし、言論は常に明快にして暢達、恰も一帯の江河洋々として緩く流るゝが如し、而も或る種の問題を解説し又は辯論等の文字を弄するに當つてや、筆調悠揚として迫らず、順を追ひ、序を踏み、縷々妮々として説反駁するところ、正々堂々として大新聞の風格あり、されど五面種の振はざるは事實にして(五面種とは社會種のこと、最初京城日報は前號にも記せし如く、社會種は特別重大事件の外一切掲載せず、四十一年頃より稍々掲載し始めたも、巷間の小些事、普通の警察種、男女間の關係等の材料は一切掲載しなかつた)此の欄は他の新聞紙に比し、遜色あるは免れざる所とす蓋し新聞紙の本能として、社會の反面に映する巷間の出來事を描寫するは言ふ迄もなきところにして、幹部始め同人の決して之れを知悉せざるにはあらざるも、當時統監府の方針として、此等の記事を歓迎せず、同紙としては其の立場上、蓋し己むを得ざるものありといふべし、其の實政派主任としては、曾て帝都に於て、飄逸奇矯の筆を以て文名を馳せし、薄田斬雲氏等のあるあり、優に稱を稱するに足るものもあるも、更に驕足を伸ばすに由なく、寂然として其の聲名の十分の一をも譯はれざるは、亦是れ是非なき次第とこそいふべけれ。

### 大韓日報

奇氣縱橫、精神の氣常に眉宇の間に閃き、而して内絶へず争氣の滿々たるを此の新聞の生命となす、大劍憂々鐵馬中空に嘶くの時、壯夫劍を按じて陣頭立つの雄姿は始めて此の新聞に於て見るを得べし、見よ其の筆鋒の雄勁にして峻

峭なる、言辭の大膽にして不羈なる、常に社會上何等かの問題を捕捉し來りて之を剖明解説せざれば已まず、狼眼鷹目、夫れから夫れへと想を著け、而も多々益々辯ずるもの、確に好個の社會的戰士といふべし、既に社會的戰士なり、故を以て論を出して慷慨の氣を帯び、策を描いて牢籠の象溢る、直情徑行、狷介個儻、恰かも當年の二六新聞に鬚髯たるものあり、唯事物に對して二方直角に走り、其の結果冷靜を缺き、中庸を誤まり時に思はざる筆禍を蒙ることあるを憾みさす、彼の一時江湖の耳目を聳動せし呼子警視攻撃の如き、快は即ち快なりと雖も、識者の眼より之れを見れば、唯思慮なき一壯夫が、怒りに任せて暴虎馮河の勇を揮ふと毫も擇ぶところあらず紙面の體裁は極めて賑やかに、殊に社會欄の優等にして劇評に花を咲かすは、其の特色とするところ唯初號又は特號活字を使用し過ぐるは考へものならん、今や亞川山道氏(現代議士)新來の英氣を鼓舞して切々筆を揮ふ、紙面の活躍一層度を加ふるものあらんか。

### 京城新報

四頁の新聞、克く論じ、克く報じ、克く評し、克く察す、少數なる記者同人の奮勵、尋常一様の比に非ざるべし、文章は概して輕妙にして洒脫、而も輕妙の中に一種肉を剔るが如き毒罵を含み、洒脫の中に一片骨を刺すが如き冷嘲を寓す常に爲政者の施政方針を批評攻撃し、當局の忌諱に觸れて發行停止の憂目に遭ふこと再三再四にして止まらず、寧ろ受書を印刷して備へ置くを便利とすと皮肉りし一社員ありとか、或る時發行停止の命に接し、雖て解禁となるや、二面の冒頭に川柳風のもの掲ぐ、曰く『畏しこまる、蛙踏まれて恐れ入る』就て其の意を問へば、身體をふまれて畏しこまり、恐れ入つてる蛙も、危害の手が緩めば、又ピョン／＼小便をヒツ掛けながら

### 朝鮮日日

編輯は若手連の揃ひきて馬鹿に景氣好く、滿紙悉く生動の觀あるも惜しむらくは重厚深沈の資に乏し趣味と實益と何れが勝るやと言はば、先づ趣味六分、實益四分の割合といふべし、概して大韓日報に鬚髯たるものもあるも、其の時弊に對して怒り易く、泣き易き神經過敏の特質は、自ら趣を異にす、文章は輕快にして流暢、宛も扁舟に掉して長江大河を下るが如し、而も所論大膽、論旨勁れ、事に當つて凜然奪ふべからざる氣節を負ふ唯勇邁血氣に任せ、躁急に走るを憾みとす。

### 卓上小閑録

川田健吉

- ▲本社々友西村正雄氏は今度朝鮮鐵道を退かれた、人物風格實に立派な人であつたが——朝鐵のため惜んで己まない。
- ▲氏は本號に『或月給取の哲學』を書かれた、飄逸奇警、眞に近來の好文字である。
- ▲毎日申報編輯長伊藤韓堂氏、久々で『鶴龍山の話』といふ一文を寄せられた、が旅先でその結論を書いて送られる筈の處、締切迄に著稿しない、遺憾千萬である。
- ▲朝鮮ホテルの伊藤龍氏から『ホテルの話』といふ趣味津々たる一篇を寄せられた、が非常な長文で本號には載せる譯に行かなかつた次號には何とか都合しやうと思ふ



洗 硯 閑 話

京城婦人病院長 王 藤 武 城

朝鮮も此頃随分古硯が流行る。僕に鑑定を依頼されたものゝみでも己に千面以上は確かにある。然かし之れはと思ふものは十四五面に過ぎぬ。中には數百金を投じて購はれた物で、彫刻等は中々見事であるが、石質は丸で成つて居らぬのがある。

日本産では、山州高雄山の清麗峯黒石、若州遠敷郡の宮川谷紅梅石其他三十七個の産地があり、朝鮮では海州の靑石、藍浦の紫黒石其他十三個所計りある。然し硯として珍重すべきは、残念ながら一つも無い。

支那では端溪、歙溪、淄州、灑州、絳州、宣州其他三十計りの産地がある。

去りながら天然石としては端溪、歙溪の兩石、人造としては澄泥、瓦磚の二種、先づ此四つが代表的の物で、其他は常用底としても大した代物では無い。

端溪石は随分高價である。數百圓から數千圓、中には數萬圓と云ふのがある。元來眞の端溪石は宋末に掘盡して居る。唯一つの一坑は之を封鎖して、坑を開くに一々勅許を要し、乾隆以後三回開かれたのみで、取出した石も一々朝廷記録に残して居る。其坑道も狭くて、斧を持つ者、燈火を持つ者と、四人一組

となり、水を汲出す者を加へて人夫が二百人一團となり、約三ヶ月を要するそれで、必ず幾人かの死者を出す。治平四年の開坑の時は坑道の巖が墜ちて數十人が一時に死んで仕舞つて、其坑口に墓が作られてあると云ふ。支那人は山靈が石寶を惜んで、人間の取去るのを惡むのだと稱して居る。兎に角其費用のみでも大した物で、一面數千數萬金を價するものも當然である。

然し朝鮮には古來支那との往來には良硯を持ち來る習慣があつたので、鑑定眼さへあれば意外の良品を安價で掘出すことがある。歙溪硯(又は歙州硯)は今も出る

◆ 雜筆社閑話

山 田 謹 吾

然し良品は少い、矢張り古硯に限る。徽州務源の龍尾山から出るのが一番である。端溪に比すれば石質粗疎で、從て磨墨は前者よりも早い。淡墨を生命とするには餘り適しない。端溪の自然石は掌大なのがが多いが、歙州硯には聞々尺大なのがある。澄泥硯は采州を第一とする。今は全く出來ない。眞似た物はあるが硯としては全く役に立たぬ。唐時代には端溪や歙州よりも以上に珍重されて、蘇東坡は有名な泥硯賦を作つた。又實際一種獨特の墨あたりであつて、夜半四隣寂たる頃淨机に向つて、靜かに良品の澄泥硯に墨器を磨する心持は、此世ながらの極樂の境涯である。瓦硯は長安の未央宮の瓦硯を第一とする。銅雀瓦硯之に次ぐ。何れも前三者に比すると稍々粗であつて、水に濁することが早い。歴史的に面白いと云ふだけで、實用には餘り取らぬ。朝鮮製の瓦硯もあるが、驚くべき惡品である。

▲本號『京城昔ばなし』は山田翁の直話を速記したのを、翁の加筆を乞ひ、更に翁が數名の當時を知れる方々を訪問されて對談の後更に再び修正補足されたもので、翁の本誌に對する絶對的好意と、錯誤を後代に遺さざらんがための周到なる用意とを、讀者に見て頂きたい。勿論記者と雖も、濡鼠の如くになつて翁を訪問したのが、大風雨の廿二日、稿愈々成つたのが二十六日の夕刻である。無責任な

ヨタとは少しばかり譯が違ふ。

▲前號徳野眞士氏の靈筆に蔽つた畫家、天草神來の逸話は讀者の心にさまざまな感興を齎らしたと思ふ。がその神來の畫を秘藏する人として洋服店濱吉太郎氏が二十點以上徳野氏が十點以上、本町青々園倉田氏も恐らく之に劣らぬほど所持されるらしい。此外にも大勢居られるだらうが――。

▼序でながら季完用侯の幅を最も多く所藏される一人として同じく瀨氏が有る。何年の昔か、佛蘭西教會に於て季侯遭難の際、身を擬して之を救つたのが誰であらう濱吉太郎君其人であつたのだから、無理もない話だ。



# 或月給取の哲學

月影山莊主人

西村正雄

◎彼の月給生活は最早二十年を超える。世には往々獨立の營業を奪ひ、月給生活を捨て、士族の商法などを營むものあれども、彼は決してサラリー生活をサラリと止めることを欲しない。彼の哲學に依れば、今の世の中は政治も産業も月給取なくんば其組織が成立たぬ後藤子（註）が東京市長の給料を辭退したと聞いて、故安田善次郎翁が卒爾として、其れは一旦受取つてから之を寄附したのか、但しは初めから辭退したのかと電話で問ふて來たので、子爵會計規則上一旦受取つてから寄附したのだと答へると翁は驚いて貴下は飛んでもないことをなさつた、さうすると所得税が掛りますよと一本參つたのは流石の後藤子も名にし負ふ安田流の深慮深謀に悉く敬服したといふが、實際月給を辭退しやうと、寄附しやうと、將た之を受取らうと市長が月給者たることに變りはない。單り市長のみならんや、亞米利加では大統領、お隣りでは大統領に至るまで、亦是れ一個の月給取ではないか。といふものは彼が月給取たることを光榮とする理由に外ならぬ。

◎彼は何時も言ふだが、彼の哲學に依れば、月給取は貧乏を以て本領とし、若し月給取で富むものがあれば、何か不正なる理由が潜むに違ひないと彼れは呪む。

斯くしく彼は時々質屋の御厄介に爲り、居常人に向つて、春と秋と質屋の入れ替へに至つては、人生の最も光彩を放つ場面にして、月給取の難有き亦茲に在ると言つて居る。或年の末に彼は質屋から利息の催促状を受け、得意満面捨て、流そか橋買出そか

## 年の瀬川の一思案

といふ歌を添へて、之を同僚の回覽に供したるが如き、以て彼の哲學の一斑を窺ふに足る。

◎彼は獨身で通して居る。料理屋へでも行つて煙草を勧められると彼は懐を上つて、御免、御免、煙草とビールと女とは、僕生れてから全く味を知らぬのですと口癖の様に言ふ。一説には彼には眞に妻子が無いともいひ、一説には彼は現代の禹であつて偶に内地へ行つても電報で妻子を停車場へ呼んで會ふだけだともいふ。何れにするも彼の哲學では、月給取は即ち轉勤生活だから、家族など仲ふのは間違つて居る。轉勤の度毎に之を引張り廻り、甚しきは出張の先へまで連れ歩くに至つては、精神に異状があるとか受取れぬといふの論法を用ひる。併しながら彼が嘗て集賢病院を參觀して、女の氣狂に抱付かれた時、大に感心して世の中で自分ばかりが正氣だと思ふのは、即ち氣が狂つた證據だと言つたことを思へば、彼の哲學の

價値亦知るべしである。

◎彼は屢々人の就職の世話を頼まれる。上は二代の政治家より下はお茶居の仲居に至るまで、随分色々な人から頼まれるが、彼の哲學に依れば人間といふものは、頼むときには哀訴歎願如何なる報酬をも辭せぬ様に振舞ふけれども、さて目的を達した曉には全く關せず焉で、禮狀一本寄越すものすら、寧ろ晨星の如しとある。それはさて置き、彼や彼の同僚は、就職の依頼其他何事かの目的を達せん爲めの手段として、或は又或目的の達せられたることを感謝するの意味にて、人から物品を貰ふことがある。彼は之に對し前者には『貝扇』後者には『示扇』といふ名稱を附して居る。蓋し前者は賄賂の賄の字、後者は謝禮の禮の字を暗示するもの。而して彼は彼の哲學の命する所に従ひ、貝扇も必ずしも之を拒絶するに及ばざれども、之を受けたるものは必ず之を會社へ持集まらしむることを掟とし、一面寄贈者には必ず會社の野紙と封筒とを用ひて禮狀を發するを例とする。時としては即ち贈賄の妙を極めたる名文が發せられることもあり、とにかく同じ人が二度と寄贈して來ることは無いさうな。而して現品は時々抽籤にて同僚に分配せられ、其品々に歌が添へらるることあり、彼が得意の作であらう。嘗て同僚の一人に分配せられたる、魚の干物——何れ貝扇として贈られたるものか——に左の一首を書いた札が附せられて居るのを見た。

生きた貝なら物にもせうが  
干したまかなは曲かない



變なことも

京城府廳  
醫學博士

加藤賢

一、

虎は死して皮を遺し、人は死して名を残すとは、子供の時からイヤと云ふ程教え込まれた言葉だ。夫から永い間如何様ぞ、だと只管感歎して居つたが、飛んでもない！こんな馬鹿らしい事はない！名は實なり、影なり、空なり、豚の尻尾の意味もない。何んで唯一言『働け』と計り教へて呉れなんだ變なことだ。實なき影のみ追ふて得たる向も(世の中には)多いぞうな、愈以て變なことだ！

二、

役人のした仕事は、其まづかつた方面計りを無茶苦茶に世間から啄き廻はされるから、自然眞面目に働き甲斐がなくなり、一寸目新らしい、考へて見れば餘り役に立たぬ事を無理に考へ出し、色々な文句を並べて見るか、左もなくば進むよりも退いて安全第一事勿れを祈る様になるんだぞうな。紙には汚い裏計りで奇麗な表がない様な事を云ひ廻るもチトミウかして居るが、之と同時に眞面目に働き甲斐のない所に停まらうとするのも變なことだ。

三、

人間の身體は好きな物にはチキイトあたらない様に出来て居る。醫者は之を知つて居るから一般に不消化なりとせられて居る物でも平

【三〇】

らば斯様な餘儀もない間違つた思想を素人に吹き込んだのは誰かと云へば、何ぞ計らん醫者自身だ。これも随分變なことだ！

◆會頭のこと

大西清雄

氣でドン／＼平げると、素人は醫者の不養生と、格言の様なことを言ふて済して居る。素人と云ふ者の多くは鶯のスリ餌の様な物計り食ふ事以外に食物の衛生はないものと心得て居るのだから變だ。然

會議所會頭といふのはいくらか何でも屋式の人物でなくては不可ん有賀さんなら結構だがチト玉が上玉過ぎる、あの人はいゝ加減なことは出来ない人だ、やれば熱を有つてやる人だ、が同氏の受諾は絶望的だ、まああきらめろ／＼。

流行雜感

三襲服店 藪、崎 篤志 郎

流行と云つても別に華美なる方面許りでなく、一般人の呉服物に對する嗜好が或る程度迄時代思想に依つて變化して行く様に見える。

今日の思想界にミリタリズム、ソウシヤリズム、アナキズム或はゾオルシビイズム等種々の思潮がある如く、その嗜好も多様に別れて居るが、之を統一して見れば一般民衆の思想に從つて一の流行が生れ出るのである。

未だ思想界の進んで居らなかつた時代には流行と云ふものが織物業者或は呉服業者に依つて創造されたのであるが、近代は一般人士の趣味嗜好が向上して居るので、流行は大體に於て消費者に依つて造らるゝ傾きがある。

民衆の思想的傾向の歩む所に需要者の購買心の基調を構成するのであるから、その芽生えを捕へて販賣者が進んで行くこと、それがその時の需要者の趣味と合致し、一の

嗜好流行となつて廣くスプレードして行く、經濟界の好況時代には一般思想の反影として贅澤なる絹物としては極めて華美なる柄合のもの、亦綿布としては永續性のものでなくとも總じて體裁のよきものが求められたのであるが、一度暴落の際に襲はれてからは、漸次柄合もオチツキたるもの、質も耐久力のあるものと云ふように變つて來た、そこに一般的思想の健實を見る事が出来ると思ふ。

震災後の東京は積極的復興の氣運に充ちて居るので從つて嗜好も中々派手であつた、之に反し京城は一般經濟界の好況時にも深き影響もなく大體として溫和なる思想嗜好を辿りしが故に賣れてゆくものも餘り華美なるものもなかつた。之等の事を考察して見ると、その時の呉服物に對する一般的嗜好が即ち時代思想の反影であると思ふ事が出来ると思ふのであります。



株 界 雜 筆

京城現物取引市場 中 村 櫛 團

の感に勝へない、其は何事を物語るのであるか、株に對する人氣の離散とも云へよう、財界の不況と云ふ根本原因の外に熱狂時代が過ぎて今は極端な沈衰時に當面したからである。

貴重な京城雜筆の紙面をクダラヌ株界雜筆で埋めるのは、實際に於て私は永樂町人氏に對して惜しい氣もし、又讀者各位に對して相濟まない感じとする。併し私の株界雜筆は株式經濟の専門的に亘る事は避けて、唯私が現在の立場に在つて、見聞した事なり、感想なり種々雜多の事を書いて、樂にもならぬ代りに又毒にもならぬ事を書くのを主眼としてゐる。頃日來私の記事に對して五六人の讀者の方から推問の意味なり又は贅詞なり(過分である)又は株式利用方法の相談なりを持込まれてゐる。私は私のクダラヌ雜筆が若干のお方にしても斯くの如く眞面目に讀んで頂いてゐると云ふ點に付ては、衷心から感謝の誠意を捧げずには居られない。私は私の書いた事柄に付ては飽くまで責任を帯びてゐるから、御質問に對しては喜んでお答を致し、又御相談には喜んで應ずるから、ごうか住所と御姓名を明かにして頂き度いのである。

筒の電話も誠に物淋しく、人の行來も更に無いのに一驚を吃した、今少し何とかならねば京城も夏枯より秋にかけては、まだ此の上の不景氣になりはせぬかと思ひうかべた云々との浩歎的文意であつた。成程一時頃では、立會場が森閑としてゐるのも無理は無い、立會は午前十時と午後二時との二回に開始するのである。立會中はまあ不振ながらも相當に賑つてゐるが、併し大正十年の夏秋の交に於ける状況とは、場面が一變してゐて、實に今昔の感に勝へない、私は當時の思出を茲に書いて見よう。

京取百二十五圓で八百やう『よし取つた』と云ふ工合に、寄り附一本でさへ千二千多いときは三四千さ出來て、チヨンと撃拆の響きが鳴り渡る度毎に場内がドヨメキ渡つて、大手筋の緊張した顔面が得意と失望と……と種々に表情されながらも、潑刺たる元氣のあつた大正十年の八九月ごろと、今頃とは洵に雲泥の相違であら、二十五圓は同じ二十五圓ながら百と云ふ豪を吹き飛ばして、只の二十五圓であつて一千やらう二千三千取らうと云ふ様な、聞いても清々する様な事はなく、二十三十と云ふ様な手合せで當時とはまるでお話にならぬ不況さ加減、實に今昔

現下の株式界の状態は、例へて云へば營養不良者や病後の人達が相撲を取組む様なもので、直ぐヘトヘトとなつてヘタバツて仕舞ひ、長く取組むと遂には虚脱して命を落すに至る様な危険がある。仕手が實宣傳なり買宣傳なりをやつて巧みに相場のをやをつけて行くのに、マバラが銘々に提灯をつけてワイワイ(其の元氣たるや昔日の比にあらず)と騒いでゐると何時の間にかやらスカタンを喰はされて振ひ落されるのである。此の仕手が僅に一二の人である爲に、馬鹿を見るのは何時でも多くのマバラと相場はきまつてゐるのである。斯くしてマバラは相應の痛手を負つて引込み、負つては引込むので、場面が益々寂れる一方である。

今日も〇〇〇氏から六月號の私の記事に對して鄭重な書面を頂いた、そして其の末節に『前略久振りに市場を拜見したが、如何に財界不振とは云へ、場内は丁度午後一時頃ではあつたが、鮮童が一人居眠をしてゐるだけで立並ぶ數

堅實な有力仕手が嘗にも買にも双方に相當に腰を入れて、夫にマバラが思ひ／＼に提灯をつけるとすれば、相場の呼吸は健全で、場面は相應に賑ふのであるが、現在では夫が望まれない、仕手は僅に一人か二人である爲に、神出鬼没的で正體が判らない、之にマバラが提灯を付けると、直ぐに姿を消してスカタンを喰はすので、洵に危険であつて、安心してやれないと云ふのが、近來の場況である。之が財界の大勢や、投機資金の缺乏以外に株式界が不振閑散を呈する一因であると見られる。

お前の誕生まで

— 育兒日記に代へて —

京城日報社 河西 青苔

去年の秋の終りに、私達の間の長女であるお前が生れた。——何よりも倅ひだつたことには、お前の母の乳が清らかでそして非常に澤山だつた。お前はその清らかな乳を何時でも呑み剩してぐんぐん肥立つて呉れた。お前の育ちの良いのを見ては私達はホッとして安心の軽い溜息をつくのだつた。

お前の母が、やがてお前も知らねばならぬ或一つの大切な時期に遭遇して、やはり懶く憂鬱になり何となく平常の嗜好とは異つた果實などを要求するやうになつたのは私達にとつては忘れ難い去年の春のことだつた。

何故私達にとつて忘れ難いか。それはお前の母が實にお前を受胎したといふ、謂はばお前からお前の母への、親しみ深いそして大切な『最初のささやき』が語られた、記憶すべき時であつたからなのである。

だが私達が、去年の春を忘れ難いといふのには、この他に更に或る重大な危機が關連して同時に襲されて居たといふ、大きな理由もあつたのである。

お前の母が、お前からの『最初のささやき』を親しみ深く聞いて居た時、お前の父は又折疊く、かなり重い盲腸炎を病んで或る病院の一室に寝て居たのである。

お前の母がその時、お前の父の允許でどんなに心配したことであつたか。豊かでないお前の父母は、

附添人に代つて貰ふ餘裕もなかつたので、およそ一月餘り、お前の母は殆んど睡る時間を與へられなかつた。夜更けた病院の裏手からコソコソと、お前の母が廻る水の音が淋しく聞えて來たことも幾度かあつた。お前も知つて居るであらう、お前の母は随分氣丈なものであるが、それでも看護の朝夕に、人知れぬ涙を目に一杯溜めてシヨンボリ坐つて居たことも幾度かあつた。

お前の母の人知れぬ涙と何故いふか。

實はお前の父は、病氣が案外に重かつたので、一時醫師から面會も讀書も談話すら禁じられて仕舞つた。絶對安靜を保ち些細な感情の動搖ですら禁物であると、固く宣告されたので、お前の母は、お前からの親しみ深い『最初のささやき』を、遂にお前の父へ打ち開ける機會を失ひ、獨りの胸に藏めて思ひ耽つて居たのである。

お前の母は、どんなに早く打開けたいと思つて焦慮したらう。それなのに力と頼むお前の父は醫師から談話すら固く禁じられて居る。若しも此のまま死別れるやうなことにでもなつた時は、——何うしやう——と、お前からの『最初のささやき』を聞きながら、お前の母のやる氣なきの涙であつたらうことは、お前にもはつきりと判つて貰へることを思ふ。人知れぬ涙、打開けねばならぬ人に解れぬ

涙、お前の母の涙が實にそれであつたのである。こんな激しい心配や過度の看護がお前の母の體軀に、何の間違ひをも生ぜなかつたといふことは、奇蹟でもなければ滅多にないことである。世の中の多くの母は、その子供から『最初のささやき』を受取る大切な時機に、心配事や過度の勞働を最も強く恐れなければならぬのである。それだのにお前の母は、その大切な時機に、殆ど一月餘りも睡らぬやうな過度の勞働を強いられ、その上に人知れぬ涙をまで幾度も流して激しい心配をしたのである。

お前の父は重い病氣が漸く怠つてから、お前の母からお前のことを打開けられて、今更らに驚き且つ心配したのである。激しい勞働や心配がどうぞお前の母の體軀に何の影響も與へて呉れぬやうに、お前が無事で誕生して呉れるやうにと、專念そのことのみを願つて居たのである。

倅ひにしてお前の母は、この重大な危機を切抜けて呉れた。お前は生れた。而もお前はぐんぐん肥立つて行つて呉れた。

お前の父の歡喜！  
お前の母の歡喜！

『お前の誕生まで』にはまだ書きたいことも多い。然し、お前に、私達に對する感謝のいろいろがあるとすれば、まづ最初に、お前の母にまで、その感謝を捧げて貰ひたいものである。お前からの『最初のささやき』を聞いたお前の母は、よくお前を守つて呉れたのである。あの激しい心配と勞働とに向つて『母性の戦ひ』を宣言しなから——。

いはれる。



涙、打開ければならぬ人に解れぬから。

いはれる。

太平洋の凹みは、月の脱出したその痕跡だといはれる。

天體を觀ることは、驚きである、怖れである、時としては、人間の自信を、すっかりなくしてつぶ。

雨

雷は大嫌ひだが、夕立は宜い。

一雨過ぎると、地がしめり、樹々が蒼み、思はぬ草にぼつと花が開く。

黒雲騎墨未遮山。白雨跳珠亂入船。卷地風來忽吹散。望湖樓下水如天（蘇軾）。

以前は、斯うした詩を喜んだこともあつた。

が今は、睡々しくて不可ない。

夜熱依然午熱同。開門小立月明中。竹深樹密虫鳴處。時有機凉不是風。

是れは揚萬里だが、靜かで宜いと思ふ。

斯うした實驗もある。

桐

桐の花が好きだ。

竹もわるくない。

が借屋住ひでは、何をどうすることも出来ぬ。

今年も多分隣の官舎の垣に、晝間の風に、さや〜と鳴つて居るアカシヤを觀て、夏を送ることだらう。

◆松風のこと

西尾 徳治

丸山さんの『松風』に對し民間謡々の松風黨は三越の橋本氏である丸山さんの松風愛用原理はマダ拜聴しないが、橋本氏には堂々たる愛喫原理があるらしい、何れ次號に『松風雜筆』でも書いて頂かう



漫 語

永 樂 町 人

鰻

鰻は、好物である。けれども暑中は、たべやうとは思はぬ。如何なる珍味も、汗を流しては、旨くない。

鮎

鮎は、誰からも好かれる。姿が清楚である。味が淡泊である。暑中の配菜の、第一に數へらるゝ所以である。

又

鮎は硅藻を食つて生きるものである。その硅藻は、砂質の河床に生ずるものである。既に砂質の河床ださすれば、その水の清冽なることは、敢て多言する迄もなからう。即ち鮎は、魚族中、最もキレイな産褥から生れるものである。

又

鮎をたべる時には鮎の搖籃——白砂清流を想像して貰ひたい。あち一層佳良であらう。

山

暑中は、山の中へ這入つて、寢たり起きたりして見たいと思ふ。曉に泉の音を聴き、夕べに晚鐘のこだまするを聴く。疲れた神經が恢復することと思ふ。

壘

山の中の赤い罫が私は好きだ。それは清泉のほとりに居る、谷間のせくらぎの中に居る。青々とした水草をわけて、遊行する。蒼音を聴くと、ちよろ〜と隠れる。息を殺して居ると、亦ちよろ〜と出て来る。

何といふ可愛い生命だ。塵ほど靜寂を好むものはなからう。彼れの一生は短いが、併し偏へに靜寂を以て、おのれを守らんとする氣持は、私は同感だ。

月

晴れたる夏の晝間の空に、白々とうかぶ月を觀るのが、私には何よりの樂みだ。

それは大底思ひ懸けない時、思ひ懸けない空に浮んで居る。満天蒼茫、月はひとり微かに懸かる。

何とも言へぬ。又

木浦に居た時、小學校の庭に出ては、此の晝の月を望んだ。校庭は平面である、天空は、弧狀を成して居る。月はその七八分目に懸かり、微茫としてその孤を守つて居る。

形容の言葉がない。又

我々から月まで九萬里——、何といふ遠い存在だ。が月は、モト地球から脱出したと

編輯後記

一 記 者

▲いよ／＼お暑くなりました。  
 ▲私共も編輯に校正に、大汗を流して居ます。  
 ▲時分柄、どうか御自愛を祈ります。  
 ▲本號には随分いゝ原稿をあつめたつもりです。涼宵清夜、靜かに御通讀下さるなら仕合です。  
 ▲地方官會議の眞つ最中、丸山警務局長が百忙を排して『國境の赤ん坊』一篇を御執筆下さつたのは感謝に堪へませぬ。  
 ▲時實知事さんも、實は御同様だつたのです。  
 ▲民間の藤井さん、山口さん、天日さん皆忙裡の忙入です。原稿を下すつたのは、ヨホドの御好意だと喜んで居ます。

▲守屋さんの『藝術經濟』は、頗る面白いもの、野田さんの『雨の日曜の記』は、編者頭を掻いて居ります。  
 ▲笑はずに居られぬのは、篠田博士の『首の話』、實によく掛かれとるのは、松井さんの『南大門』だと確信します。

▲社友の原稿で載せ切れないのが五六篇あります。これ等は次號迄待つて頂く外はありません。どうか悪しからず……。

寄稿清規

雜筆編輯局

一、原稿は毎月二十日迄に弊社へ届くやうお出しを願ふ。  
 一、長さは十五字詩、百行位が好都合です。  
 一、政治を論じないやうに願ふ。  
 一、原稿には本名を御署名下さい  
 一、先着順に依つて掲載します。

【三八】

◆本誌執筆諸家

(いろは順)

伊藤大輔氏	伊東院兼雄氏
石川久臣氏	西本暈二氏
西村滿藏氏	西村正也氏
堀内滿輔氏	別府八百吉氏
徳野眞士氏	小野久太郎氏
河谷靜夫氏	河西晋吾氏
川端三次郎氏	加藤松林氏
田村直一氏	高木背水氏
野崎眞三氏	工藤重雄氏
榎本隆氏	寺田壽夫氏
秋山忠三郎氏	光永繁潮氏

大正十三年七月八日印刷  
 大正十三年七月十日發行

一部定價金二十五錢

京城府和泉町一六四

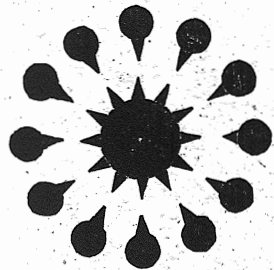
發行兼 松本武正

編輯人 下村鐵男

印刷所 京城日報社

京城府和泉町一六四

發行所 京城雜筆社



京城 早川堂看板店

電話本局二四七六番

夏向背廣服  
同オーバ  
レインコート  
新地質續々着荷

任立念入り價格は安い  
經濟的理想の既製品頗る豊富

▲御注文に應じ特製仕候  
京城 鐘路一ノ一九

角田洋服店

電話光化門九五五番  
振替京城一八四三番

株式會社 大同銀行

平壤府大和町

子菓用應實の松産山剛金

金	金	金	金	金	金	金	金	金	金
剛	剛	剛	剛	剛	剛	剛	剛	剛	剛
で	こ	う	し	お	羊	煎	饅	山	剛
ん	の	に	る	こ	羹	餅	頭	山	剛
ぶ	わ		こ	し					飴
	た								

電話本局  
番七十二  
番五七四

店本屋龜

町目本城京二

東京竹内製金庫

世界第一のエール符合機は竹内製  
金庫のみが日本の使用権を専有す

京城本町二丁目

株式會社

熊平商店

電話本局 三六二五四番

アイリス自転車代理店



合名  
會社

千代田商會

京城黄金町二丁目  
電話本局 二九二七番  
振替口座 京城 三四八番

官製食卓鹽

朝鮮總督府專賣局製造の本品は理想的經濟的の調味料で文化生活に缺くべからざるものであります  
 徳用大瓶小瓶振出瓶等數種の美しい瓶入で價格低廉です是非御使用願ひます

京城府南大門通二丁目九七

發賣元 富田商會

長電話本局三三〇九番  
 振替京城四五六八番

京城明治町二丁目



木村屋

電話本局二八七〇番  
 振替京城二八八二番

キリンビール  
ダイヤレモン

鰻  
蒲井焼

東京  
生そば

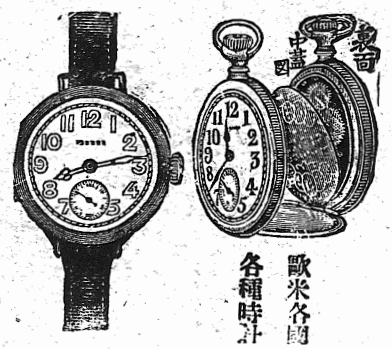
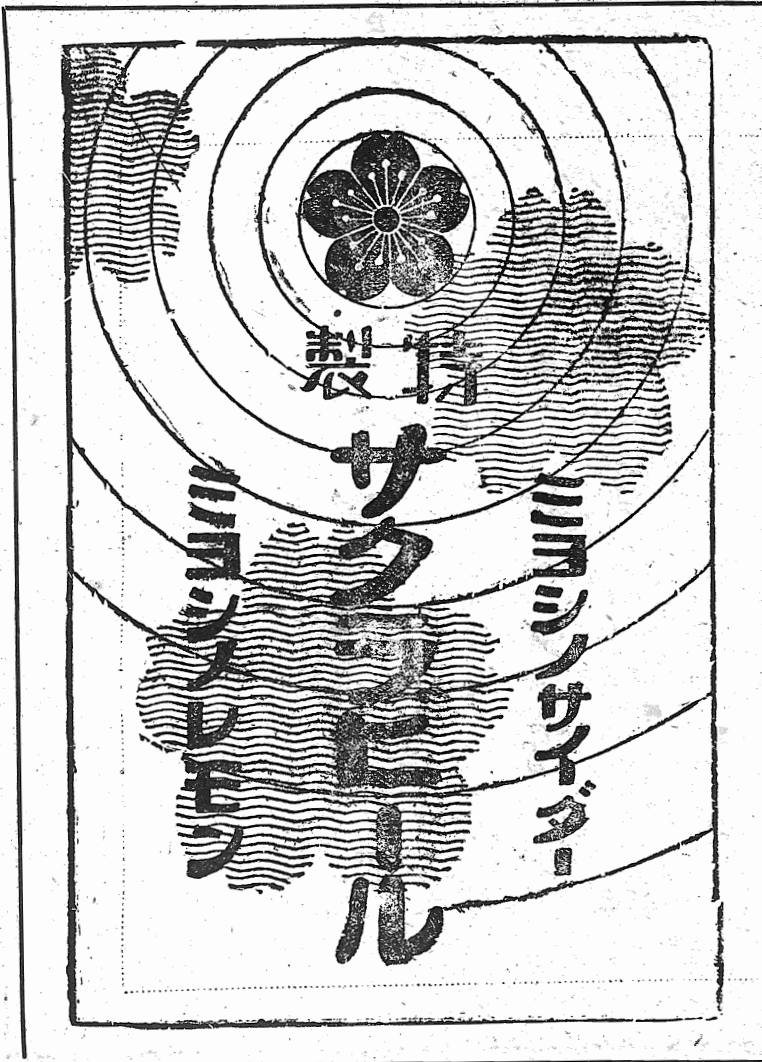
ま

の

む

京城明治町二ノ七三(三越裏)  
電話本局一六四六番  
(イロシロ)

階下食堂新設致し居り候



歐米各國  
各種時計

數ある時計店の中で  
一番安心して買へる店

村木時計店

京城本町二丁目  
電話本局四七一番



サツポロビール

エビスビール

アサヒビール

◎銘仙と

毛糸◎



京城本町

奇、婦、也

堀内満輔

電話本局 八五五  
九〇〇  
〇六五

◎多少に拘らず御用命

の程を願ひ上げます

京城雜筆 (第六十五號)

大正十三年一月二十九日第三種郵便物認可  
大正十三年七月十日發行 毎月一回十日發行